～現代版じゃりン子チエの近所付き合い～

隠岐の家プロジェクト

エリアを活性化させる一丁目一番地は元気な「地域コミュニティ」の再生。ハコモノではなく、まちなかの空家や空地・露地を生かして海とまち・多世代をつなぎ、自然と地域の交流と笑顔が生まれる。そんな温もりある近所付き合いを取り戻しませんか？

広域の考え方：歩いて楽しく安全なまちに

台地を囲む地域を、水辺の街路、街並みの街路、通学路の３つの街路、そして空地を活用したポケットパークでネットワーク化。歩いて楽しく、いざという時の避難にもうまく対応したまちの道。ネットワークの手始めが西郷港周辺再整備です。

①既存の小学校通学路の改良
歩きにくい所や狭い所があります。避難路として誰でも安全に通行できるよう段差の解消、手すり設置、夜間照明の追加等改良を実施。中町の点線は新設が望まれるルートです。

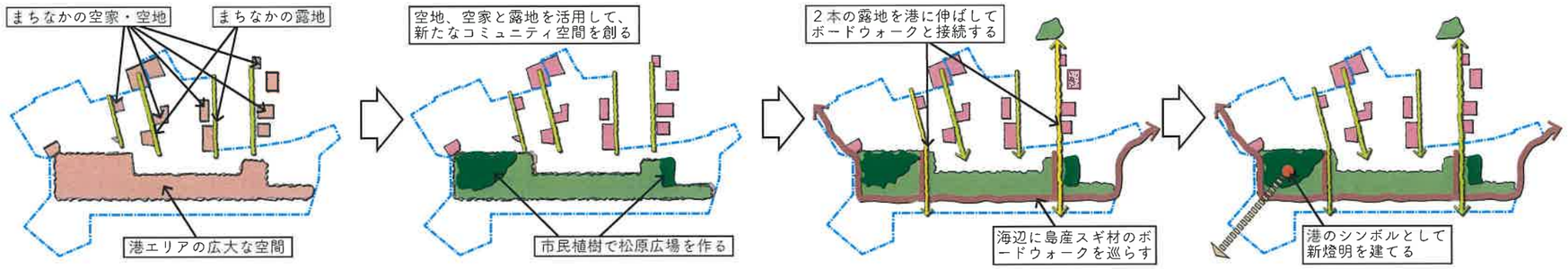
②避難誘導サイン等の設置
誰でも避難路の起点や曲がり角がわかるよう解りやすい案内サインを設置したい。

③既存街路の改良
様々な舗装や色が使われてる現状を落ち着いたデザインの歩車共存街路に再整備したい。

④川辺、海辺の散歩道の整備
地場スギ材のデッキや手すり、オシャレな案内サインで、地元の皆さん、来訪者の方々が快適に散策できる水辺の空間を整備したい。

⑤ポケットパーク、松原広場の創出
散在する空地は貴重なまちづくりの資産。ポケットパーク等の溜まり空間をつくり、港には防災拠点ともなる松原広場を創出したい。

デザインの考え方：まちなかの空家・空地・露地は未来への宝物。眠る可能性を呼び覚まし、港とまちを一体化します。



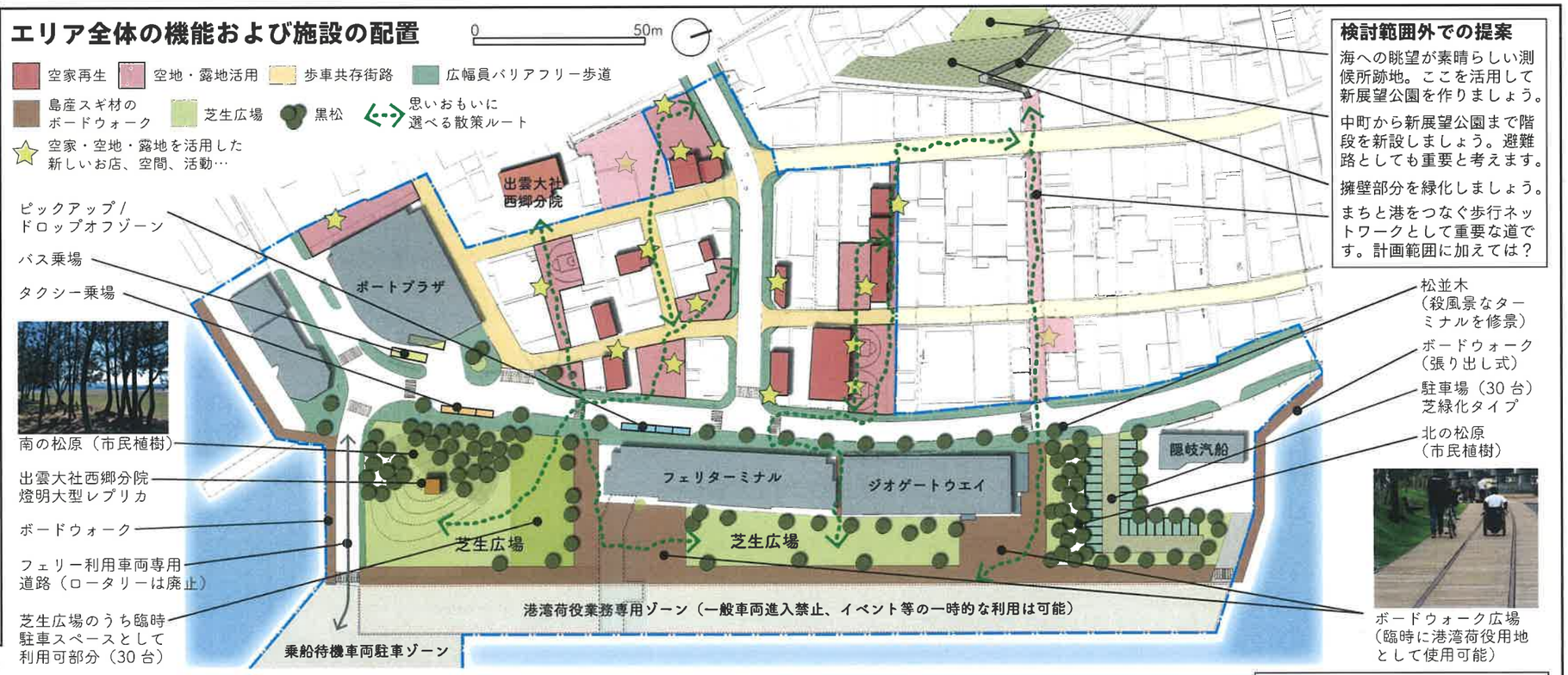
①スタート
○ハコモノだけで街は元気にはならない。まちなかの空地、空家を活用したい。
○港の広大な空間をまちの日常の前庭に。

②露地と空地、空家をセットで考える
○空家、露地と空地の活用により、隠岐らしいコミュニティ空間を再生したい。
○港には松原広場を市民植樹で作ります。

③露地を伸ばしてまちと港をつなぐ
○港への新歩行ルートとして２本の露地を伸ばし、海辺のボードウォークと接続。
○松原広場を優先しロータリーは廃止。

④燈明の大型レプリカをシンボルに
○出雲大社別院燈明の大型レプリカを入港する船からもよく見える場所に設置。まちの前庭としての港のシンボルに。

エリア全体の機能および施設の配置



検討範囲外での提案

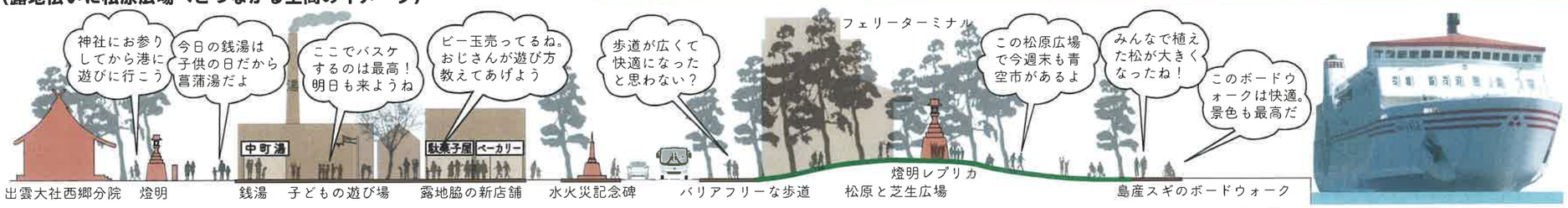
海への眺望が素晴らしい測候所跡地。ここを活用して新展望公園を作りましょう。

中町から新展望公園まで階段を新設しましょう。避難路としても重要と考えます。

擁壁部分を緑化しましょう。

まちと港をつなぐ歩行ネットワークとして重要な道です。計画範囲に加えては？

（露地伝いに松原広場へとつながる空間のイメージ）



駐車場、陸上交通機能の考え方

○路線・観光バス乗場、タクシー乗場をポートプラザ前に集約。
○自家用車・送迎バス等乗降用停車帯をターミナル前に配置。
○港北側に 30 台の駐車場を配置。南芝生広場に臨時駐車スペース（30 台使用可）を配置。
不足分は徒歩圏の空地等で分散確保。

地域コミュニティを再生するためのアプローチと賑わいづくり

海とまち・多世代をつなぐまちの再生には、地域住民や来訪者が日常的に交流できるオープンスペース＝露地や広場を創出し、対象エリアを「大きな家」に見立てたコンセプトを掲げました。かつて路地のあちこちで会話や交流があったように、近代化して希薄になった地域のコミュニティを取り戻しませんか？そのためにはまず、地域に暮らす人達が誇りに思い愛着が生まれることが最優先であり、地元の生活目線を中心に、集客・交流・賑わいを取り戻します。「まちの家」にふさわしい魅力的な暮らしや商業・交流の拠点が生まれることでまちなかに住む人が増え、地域全体で子供達を見守れる安全安心なまちこそが、私達が考える「現代版じゃりン子チエの近所付き合い」です。

隠岐の家プロジェクト（現代版じゃりン子チエの近所付き合い）

❶ 露地空間の活用・再生
空き地スペースを活用し、地域の井戸端会議や交流、抜け道となる露地、横丁、広場を整備。

❷ 玄関ー家の機能配置
港空間を玄関口、後背地となるまちなかを家と見立てたゾーニング・賑わいづくりを推進。

❸ 多世代のチャレンジ・交流
未来を担う子供達や子育て世代、高齢者まで、世代を越えて交流し、やりがいを育む地域づくり。

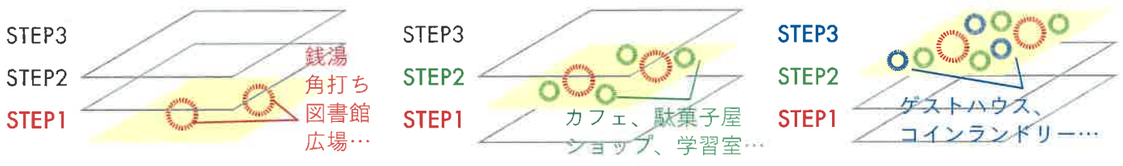
まずは地元の生活目線を中心に再生し、↓ その上で観光的な機能・満足度を付加

STEP1
多世代が集客・交流する まちのリビングをつくる

STEP2
暮らしを豊かにする コミュニティ機能拡充

STEP3
来訪者をおもてなす 客室・玄関口を充実

機能

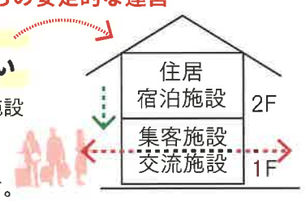


（まちの賑わい創出、持続可能なまちの運営に向けたポイント）

POINT1
定住人口増加による 日常的なまちの賑わい

まちの安定的な運営

２階を居住空間や宿泊施設に活用することで、日常的な賑わい創出やまちの安全を確保します。



POINT2
既存のストックを 活用した起業支援

小さな空家や広場・路地の出店など、高校生や若手の人材が挑戦しやすい土壌と環境を整備します。

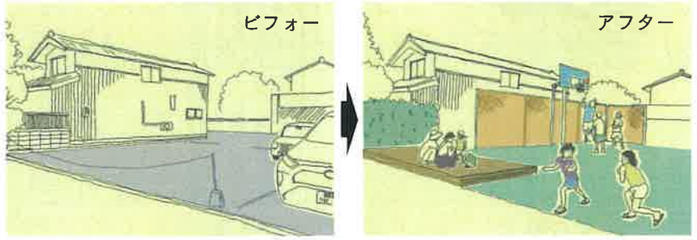
POINT3
隠岐ならではの地域発 ローカルビジネス創出

私達が有する専門家や事業者とのネットワーク、専門性を駆使し、地域に寄り添った魅力的な事業を創出します。

※これまで九州を中心に景観デザインやまちづくりの実績・ノウハウを持っている私達がパートナーになれば、地元の皆さんと話し合う場を持ち、一緒に考え、伴走していきます！一緒にまちづくりをやりましょう！空家や空地の運営の仕組みについては、所有者の皆様と一緒に考え、実現可能な手法を考えましょう！

具体的な機能の展開イメージ

地域コミュニティ再生の鍵となるのが、まちのリビング。露地や広場の会話・遊び場に加え、銭湯や図書館、角打ち、オープンカフェなど、多世代が集まれる機能を加え、まちの賑わいの核を作ります。その賑わいの核の周辺に、まちの台所やダイニング、学び・仕事場、寝床、ショップなど暮らし・商業機能を整備、各機能の連携を深めます。
生活の質を高めることが、結果的に来訪者の満足に繋がります。まちが楽しくなりませんか？



出雲大社西郷分院横の「まちの遊び場」の整備前後イメージ

（空家・空地・露地を活用した、「隠岐の家プロジェクト」の機能展開イメージ）

（まちの遊び場）
デッキ板張りの広場、駐車場、3on3 バスケコート

（まちのリビング）
バイオマス銭湯（林業と連携）、角打ち（風呂後に一杯）

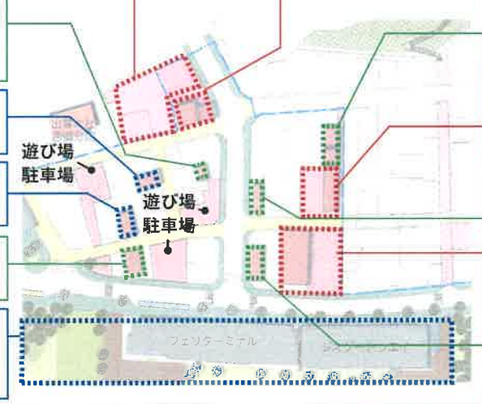
（まちのショップ）
１坪チャレンジショップ（低価格帯による若者起業支援）

（まちの客室・ショップ）
コインランドリー＆雑貨屋

（まちの客室）
ゲストハウス、お試し住宅

（まちのダイニング）
隠岐藻塩食堂（隣店舗と連携）

（まちの玄関口・学び場）
イベント・教室の交流スペース（既存機能の活用、連携を検討）



（まちの台所・ショップ）
駄菓子屋、昔のおもちゃ屋

（まちのリビング・溜まり場）
オープンカフェ＆スウィーツ 子どもの遊び場、イベント広場

（まちのチャレンジショップ）
ドリンクスタンド、加工品販売

（まちのリビング・学び・遊び場）
子ども図書館＆学習スペース、3on3 バスケコート

（まちの台所）
ベーカリーカフェ（隣店舗と連携）

銭湯イメージ（出典：黄金湯 HP）

角打イメージ（出典：黄金湯 HP）

イベント広場イメージ

図書館イメージ（MINOU BOOKS）

歩行空間：歩行者に優しい空間に

①汽船場通りと 485 号線はユニバーサルデザイン化
車椅子利用者やお年寄りに配慮し車道との段差を無くした幅の広い歩道を道路の両側に整備します。夜間はほの明るい街路照明で風情と安全を確保します。

②街区道路は歩車共存化
地域全体で統一したスッキリとした舗装にします。雨や雪でも滑りにくく、出来るだけ管理が容易な舗装手法を採用します。

③黒松の街路樹 雪対策にも
汽船場通りの港側には黒松の街路樹を配置しターミナル建物の殺風景な外観に潤いを与えます。黒松の街路樹帯は降雪時の雪寄せエリアにもなります。

ユニバーサルな道路。松並木があり歩車道の段差がない（出雲市）

落ち着いた配色の歩車共存街路（多治見市）

港空間の演出：燈明の優しいあかり

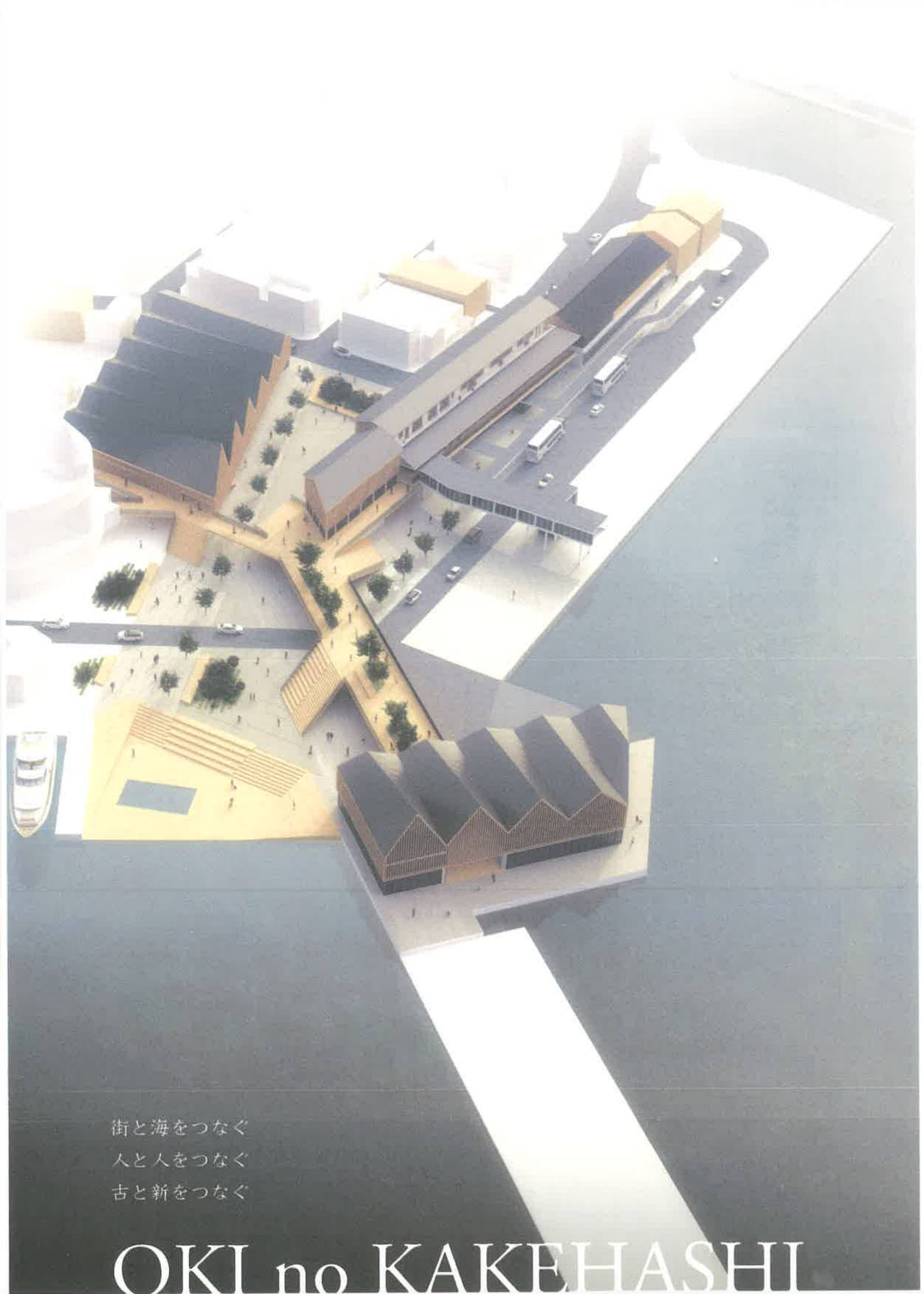
出雲神社分院にある燈明は、元は西郷港に入港する船に航路を知らせるものでした。新しい広場に隠岐の石を用いてこの燈明のレプリカを設置し、昔のようにフェリーや高速船を迎えましょう。
新燈明台は歴史ある西郷港の新たなシンボルとなるだけでなく、まちから港に人々を誘うあかりでもあります。
ロウソクのあかりに近く優しい暖色系 LED 電球を光源に使用します。

今治港で 120 年ぶりに点灯された灯明台（愛媛新聞記事から転載）

サイン計画：みんなで作る

お年寄りや子供達にもわかりやすく、隠岐の島町らしい案内サイン、避難誘導サインを、子供達も含めた島民の皆さんも参加して考えデザインします。
設置場所についても、皆んなで町歩きをして決めていきます。このイベント自体が町の再発見と防災学習になります。支柱や背板などのサインの材料には、島産の木材を活用します。

オリジナル避難誘導サインの例
（JIS 規格と隠岐の島町観光協会 HP イラストを元に作成）



＜交通＞

・一筆書きのターミナル
交通機能をフェリーターミナルと並行する港側道路に集め、様々な交通手段の乗り換えが分かりやすく見通せる形状とする。

・街とつながる交通空間
フェリーターミナルの1階を改修して港側へ通り抜けができる構造とし、町から海交通ターミナルが視覚的にも物理的にも繋がる形状とする。

・車と歩行者の分離
交通空間・駐車場へのアクセスを整理し中心部を通り抜ける道路を一部廃止、臨港道路部分を歩行者優先の賑わいのある広場として整える。

・アクセスしやすい駐車場・駐輪場
新築するメインの建物の1階に駐車場・自転車置場を設け、上階や街内の周辺施設へのアクセスがしやすい計画とする。

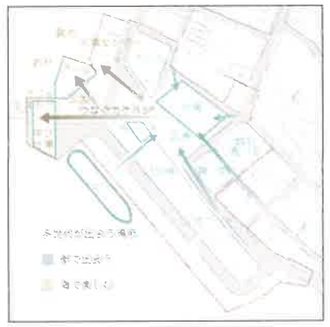
＜暮らし＞

・役所機能サテライト
銀行や郵便局など、暮らしの中で必要となる主要施設に近い街の中心部に町役場の出張所を設置し、地域内での利便性の向上を図る。

・移住支援施設（不動産・職業案内）
街に人を呼び込むための移住・ワーケーションを支援する半官半民の組織を立ち上げ、積極的に移住者を歓迎する体制をつくる。不動産・職業案内等の情報も合わせて提供を得られる場所を設ける。

・職住近接
職場の近くに住めるよう、店舗と住宅の複合建物を計画。SOHO的な使い方もできるような構成とする。

・ビジネスサポート
起業やベンチャー等の新規ビジネス支援として、行政や金融機関が連携してサポートする仕組みを作る。



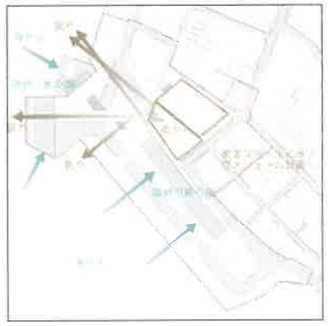
＜交流＞

・つなぐカケハシ
海と街をつなぐ結節点に、架け橋となるブリッジを設ける所を放射状に接続し、人々が行き交い集う場所をつなぐ歩行空間とする。

・海を身近に
街から海へとつながる部分にオープンスペースを設け街のあちこちから海が見え、感じられるようにする。
海辺に浮島プールや親水公園を配置し、海の近くで様々な活動が行えるようにする。

・たたずむ空間
建物やカケハシの周囲に大小様々な広場空間を設け、人々が留まり集い楽しめるような居場所をつくる。

・活動の場
街全体での様々なイベントやワークショップを企画運営する組織を設け、住民も訪問者も参加型の活動の機会を提供。



＜景観＞

・スカイライン
フェリーターミナルの塔屋部分を減築し、ジオゲートウェイの屋根形状と並び水平線を強調する切妻屋根を設置。港に面して水平に屋根が続くスカイラインを形成する。

・海と街をつなげる
海側からの視線を集める港のコーナー部分と街の中心部の広場に面した部分に、それぞれ街の顔となる建物を配置。それをつなぐカケハシを設置し、海と街をつなぐ賑わいエリアを形成する。

・隠岐の島らしさ
隠岐の島の海辺の特徴的な風景の一つである船小屋の形状にインスピレーションを得て、切妻形状の屋根が連続して連なる建物形状とする。

・街並みスケール
港から街の中心部へと建物のスケールダウンを図り、既存の街並みの合わせたボリューム構成とする。

＜商業＞

・賑わいマーケットホール
街の中心となる広場に面してマーケットを配置。地産品マルシェや製作販売、その他様々なイベント等にも活用でき、賑わいを生み出す街の中心的存在となる。

・ゆったりサテライトホール
港のコーナー部分に海を眺めながらゆっくりと過ごせる商業施設を配置。コワーキングスペースや飲食店、サイクリストやマリンスポーツ用施設等を併設。

・点から面へ
商店街は既存のコンテクストを生かしつつ、空家・空地にポイント的に新築・改修など行い、そこからじわりじわりと賑わいが街につながるように配慮する。

・出店支援
起業や店舗経営などスタート支援として様々な形状の店舗を用意。時間貸しスペースや日替わり出店等、気軽にビジネスが始められる仕組みを作る。

＜防災＞

・高床計画
新築建物の1階・役所昨日の建物はRC造とし、津波や台風等による浸水被害に配慮する。
2階レベルのカケハシが街の中心部までのび、緊急時に海沿いのターミナル・施設から街の中心部への人の流れを作る。

・一時避難場所確保
カケハシが各主要建物を結び緊急時に建物上階へアクセスしやすい計画とする。
地域で一番高い建物であるホテルへ接続する避難ルートを確保し、緊急時の一時避難場所として、ホテルと連携体制を組む。

・街をあげての避難体制
津波等予期せぬ緊急事態の際はターミナルから大城山方面の高台への緊急避難バス送迎を行う等、街全体で協力して避難するの体制を作る。

①ハーバーホール（新築・1階RC造 / 2-3階S造）
3F　コワーキングスペース：603.94m2 / シーサイドレストラン：238.49m2
2F　コワーキングスペース：603.94m2 / シーサイドカフェ：238.49m2
1F　店舗（マリンスポーツ自転車）・スポーツ船舶（シャワーロッカー）：186.80m2
　　/ 駐車場34台・駐輪場12台：834.50m2

②クロスポイント（新築・S造）
3F　待合カフェ：231.86m2
2F　フェリー・バス乗車券売場：231.86m2
1F　フェリー・バス乗車券売場：402.85m2

③マーケットホール（新築・1階RC造 / 2-3階S造）
3F　共同住宅：968.87m2
2F　店舗（市場）：1474.04m2
1F　店舗：458.33m2 / 駐車場44台・駐輪場15台：1106.77m2

④ライフサポート（新築・RC3階建）※
3F　町役場出張所：238.49m2
2F　移住支援起点：238.49m2
1F　不動産・求職サポート：238.49m2

⑤店舗・住居1（新築・木造2階建）※
2F：共同住宅：215.30m2
1F：店舗：215.30m2

⑥トラベルサポート（新築・S造2階建）※
2F：ツアーオフィス：268.30m2
1F：レンタカーオフィス・待機車両置場：268.30m2

⑦櫛岐汽船貨物取扱所（新築・S造2階建）※
2F：268.30m2
1F：268.30m2

⑧フェリーターミナル（改修）※
屋根新設：553.68m2
1F　撤去（EV機械室レスへ取替）：113.25m2
3F　店舗→機械室：56.00m2 / 室外機置場：12.6m2
2F　変更なし
1F　通り抜け通路2箇所（減築・ガラスサッシ新設）：-120.60-144.00=-264.60m2

⑨店舗・住居2（改修）※
3F　共同住宅：99.08m2
2F　店舗：99.08m2
1F　店舗：99.08m2

⑩店舗・住居3（改修）※
3F　住居内装改修：36.77m2
2F　住居内装改修：36.77m2
1F　店舗内装改修：36.77m2

⑪店舗・住居4（改修）※
3F　住居内装改修：53.68m2
2F　住居内装改修：53.68m2
1F　店舗内装改修：53.68m2

⑫店舗・住居5（改修）※
3F　住居内装改修：32.18m2
2F　住居内装改修：32.18m2
1F　店舗内装改修：32.18m2

⑬タウンプラザ（新築）
広場整備　1318.31m

⑭ターミナルプラザ（新築）
広場整備　725.55m2

⑮ハーバープラザ（新築）
公園整備　073.72m2

⑯カケハシ（新築鉄骨造）
2F　ペデストリアンデッキ：1786.65m2
1F　駐車場34台

⑰道路新設（舗装新設）
790m2

⑱道路新設（舗装新設）
780m2

⑲デッキ（新築・オプション）※
水上歩道整備

⑳浮床公園（新築・オプション）※
水上公園整備　1016.64m2

㉑解体家屋（建築面積）
1692.94m2

※将来計画とし、費用は別途とする。

3F PLAN

2F PLAN

1F PLAN 1:1500

MASTERPLAN 1:1000 / SEA VIEW

「緑でつなぐランドスケープ」

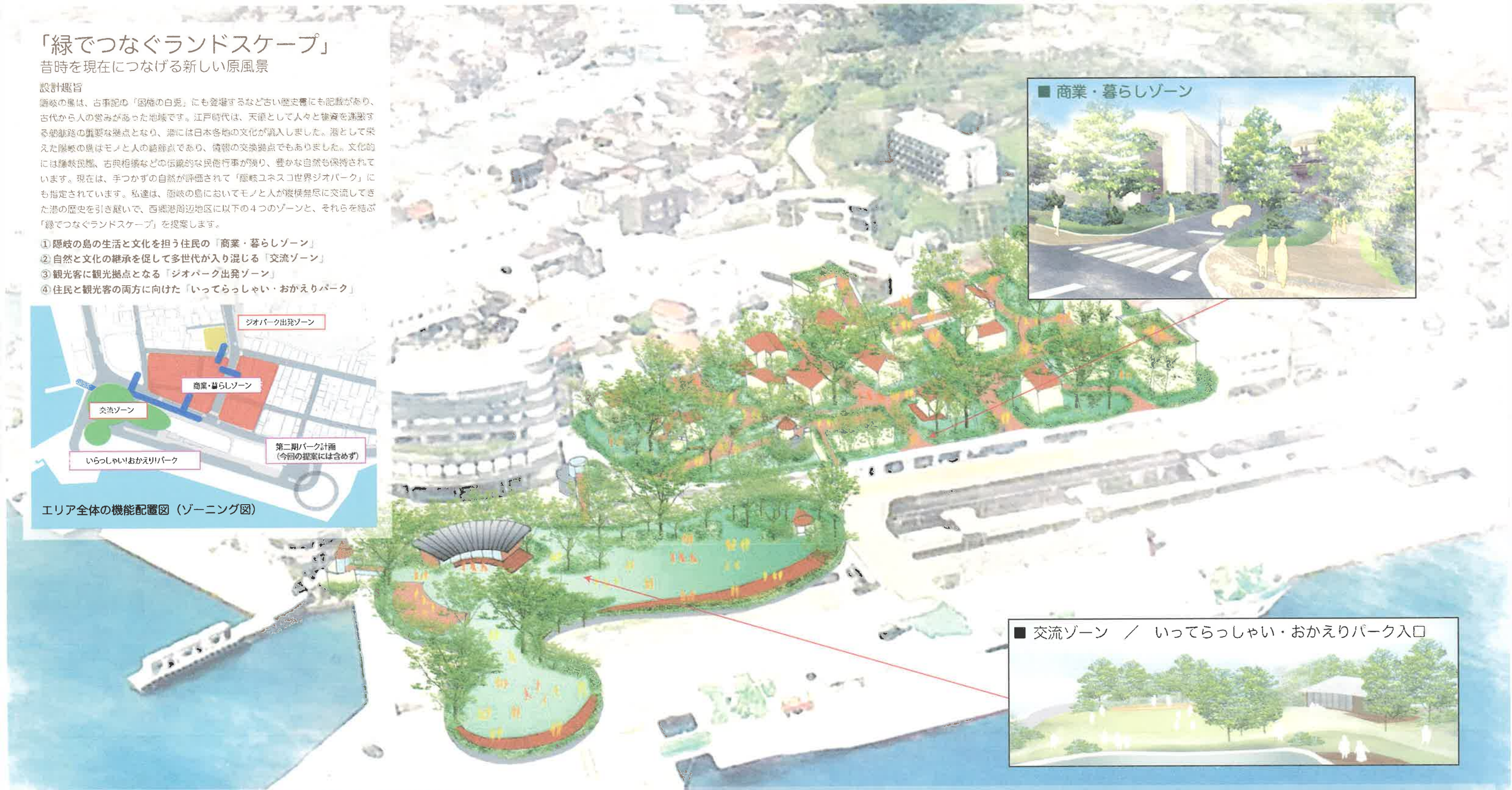
昔時を現在につなげる新しい原風景

設計趣旨

隠岐の島は、古事記の「国産の白兎」にも登場するなど古い歴史書にも記載があり、古代から人の営みがあった地域です。江戸時代は、天領として人々と物資を運搬する船舶路の重要な拠点となり、港には日本各地の文化が流入しました。港として栄えた隠岐の島はモノと人の結節点であり、情報の交換拠点でもありました。文化的には隠岐民謡、古典相撲などの伝統的な民俗行事が残り、豊かな自然も保持されています。現在は、手つかずの自然が評価されて「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」にも指定されています。私達は、隠岐の島においてモノと人が縦横無尽に交流してきた港の歴史を引き継いで、西郷港周辺地区に以下の４つのゾーンと、それらを結ぶ「緑でつなぐランドスケープ」を提案します。

①隠岐の島の生活と文化を担う住民の「商業・暮らしゾーン」
②自然と文化の継承を促して多世代が入り混じる「交流ゾーン」
③観光客に観光拠点となる「ジオパーク出発ゾーン」
④住民と観光客の両方に向けた「いってらっしゃい・おかえりパーク」

エリア全体の機能配置図（ゾーニング図）



■ 商業・暮らしゾーン

■ 交流ゾーン　／　いってらっしゃい・おかえりパーク入口

私達の提案は、隠岐の島町西郷港周辺地区を車道と歩道を分離しながら快適に楽しく安心して移動できる空間として整備するものです。住民の防災拠点としても機能しながら人々が交流し、住民と観光客が共に滞在・交流・消費できる場として開放していくこと目的としています。
これらの要項のために、次の７点を基本理念として、エリア全体の設計を行いたいと考えています。

1　「みんなが島で幸せに生きる」ことを具現化する空間であること

私達の提案する空間は、港が本来持っている重要な機能としての「多様なモノと人の交換拠点」である側面を重要視しています。幸せは、閉じられたモノや人の関係性にあるのではなく、広く様々なモノが交換され人が交流する中でこそ、創新して生まれてくるものであると考えています。よって、そうした開かれたネットワークを空間として具現化することを目指して、港についた船舶から「いってらっしゃい・おかえりパーク」で新たな出会いや再会を喜び、「交流ゾーン」でモノと人の交流を促します。「商業・暮らしゾーン」で人々との交流を体験しながら、さらに島の文化と自然を感じる観光地へ移動する拠点である「ジオパーク出発ゾーン」へ移動するウォーキングルートを計画します。こうしたルートの整備に重要なのが、車道と歩道分離の分離と立体的な歩道の整備です。このように、住民と観光客が楽しく歩いて移動できるように４つのゾーン全体を緑でつなぐランドスケープとして整備します。

2　多様な価値観を包摂できること

「多様なモノと人の交換拠点」で重要なのが、多様の価値観の包摂です。世代、地元意識、国籍、バックグラウンドを超えて、老若男女が集まり地元住民と観光客が共に関わり合う、お互いの多様な価値観を分かち合い楽しむことができる開放的な空間性を確保します。本提案では、「いってらっしゃい・おかえりパーク」と「交流ゾーン」が地面から持ち上げられて、雄やかで高さのある空間として構築されることで、住民が「郷愛の島」を「あたらしく見て感じる視点」を確保することができます。４つのゾーンでは、島の内部の山に繋がるような緑のランドスケープを確保して、夢豊な新しい価値の発見ができる街並みを計画します。

3．自然との一体感を生みだすこと

「交流ゾーン」にある「おまつり広場」では、山側と海側の両方を見渡せるような開放的な空間を体感させることで、単に多くの人が集まれるイベント会場ではなく、自然と一体となった新しい楽しみ方を観客に届けることができます。本提案によって港周辺地区に新たな人の流れを作り、人が集まることによって西郷港地域に賑やかさが広がります。山と海に生かされていると感じる開かれた環境と緑でつなぐランドスケープを創り出そうと考えています。

4．憩いの時間として過ごせること

住民が船舶に乗るという目的のためだけに訪れるのではなく、船舶に乗るのを待つ時間、島に戻ってくる人を待つ時間、イベントを楽しむ時間、観光の出発までを過ごす時間、勉強をする時間、食事をする時間など、人々が憩いの時間としても過ごせる空間にしたいと考えています。また、４つのゾーンを横断して家族で体験できるような屋外型のアート・イベントなどを開催することで、一日をゆったりと過ごせる環境づくりを目指します。

5．災害時の緊急避難場所として利用できること

海側に位置する「いってらっしゃい・おかえりパーク」、「交流の場」だけでなく「ジオパーク出発ゾーン」「商業・暮らしゾーン」が全体として災害時の緊急避難施設として機能することを目指します。温暖化が急速に進んでいる現在、環境変化は目に見える形で日本列島全体に及んでいます。いままで想定しなかったレベルの大規模な自然災害が増加しています。
これからの公共建築は、想定を超えたあらゆる自然災害に柔軟に対応しなくてはなりません。避難時だけでなく、災害後にも早急に回復できるような強靭性の高い空間であるべきです。本提案の「交流の場」は、水害時には一次避難場所として屋外空間を開放し、そこに設ける「みんなの食堂」は多くの避難者に食料を提供できる施設となります。盛り土をして地盤を上げた「商業・暮らしゾーン」は二次避難場所であり屋外空間や半屋外のテラスを開放して、一定期間の避難が可能となる場所とします。さまざまな災害に適応できる空間を目指します。

6．日常を豊かにするスペースとして利用できること

４つのゾーン全体としては規模の大きな空間となりますが、その間に人々の日常が入り混じるより小さなスケールの空間が必要です。日常生活に根ざした空間、つまりご飯を食べたり、勉強したり、アートを見たり、カフェでお茶をしたり、デートをしたり、本を読んだりする日常生活を過ごす小さな空間を４つのゾーンに分散して設けて、それらを「緑でつなぐランドスケープ」が横断しています。本提案では、非日常的なイベント・スペースや観光客向けの商業空間だけでなく、地元の人々の日常生活を豊かに演出するようなヒューマンスケールの生活環境をデザインします。

7．隠岐の島町の「新しい原風景」を創ること

本提案は、単なる観光客や住民の玄関口として印象的なデザインを目指すのではなく、昔から現在まで隠岐の島が維持している豊かな自然風景を西郷港周辺地区まで引き込み、西郷港周辺地区を利用する人々が、隠岐の島の「新しい原風景」として記憶に残るような空間にしていきたいと考えています。山の緑を海の手前まで伸ばすことで、具体的な建物の輪郭を明確にするよりも緑に覆われた集合体として表現することで、現代の隠岐の島に「新しい原風景」を再構成します。
実際に、屋外の緑でつなぐランドスケープを歩いていくことによって、「いってらっしゃい・おかえりパーク」、「交流ゾーン」から「暮らし・商業ゾーン」を経て、「ジオパーク出発ゾーン」に至りますが、そこから島内部のより豊かな自然に繋げていくこともできるでしょう。時代は変化しても、輪郭のあいまいな「緑のランドスケープ」は、人々の中で長年変わらない原風景を保持できます。

■ 商業機能に関する整備方針

目的：商業機能に関する整備方針は、商業地域全体の緑化を行うことで憩いの場としても利用できる空間とすることです。この憩いの場は、滞在時間を増加させることに繋がり、島民同士の消費、観光客の消費などの複数の主体に関する消費を促す空間へ繋がっていきます。

手法：カフェ、バー、居酒屋といった地元の人々が日常利用する空間を「緑をつなぐランドスケープ」と共に再構成する一方で、観光客の観光の拠点（お土産屋、インフォメーションセンター、休憩場所）としての機能を付加します。また、ジオゲートウェイにある「隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会」と密接な連携を行います。

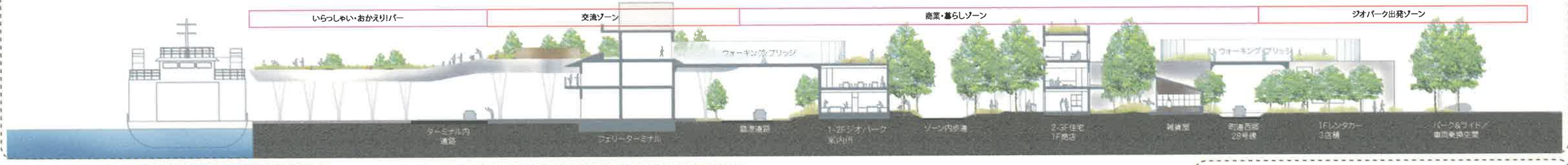
■ 暮らし機能に関する整備方針

目的：暮らし機能に関する整備方針は、暮らしゾーンと商業ゾーンを完全に分けるのではなく「商業・暮らしゾーン」としてグラデーションをもった混在を可能とさせることにあります。この２つのゾーンを重ね合わせることで、住民の生活を地域で見守り、子供も高齢者も孤立しない少子高齢化社会を見据えた未来の暮らしの空間を提供できます。

手法：商業地区と一体化して、全体を緑化することで生活の潤いのある快適な空間を提供します。住居棟は基本的には１Ｆに商業施設として、２Ｆ以上を居住空間とします。また、１Ｆ部分を貸し出しも可能とすることで家賃収入を得ることも可能となります。一部住居については１Ｆに高齢者用の住居空間を併設することを計画しています。商業ゾーンと混じり合うことで、高齢者が社会との接点を維持することに繋げられます。

■ 景観形成の方針

景観形成の方針は、山の自然が海まで降りてきて海側に接続する「緑でつなぐランドスケープ」を形成することで、かつての隠岐の島が保持していた自然のランドスケープを現代的に復活させることにあります。人と自然をゆるやかにつなぐことで、島を出発する人、島に戻る人に「隠岐の島」をイメージさせやすい新しい「あたらしい原風景」を創りたいと考えています。

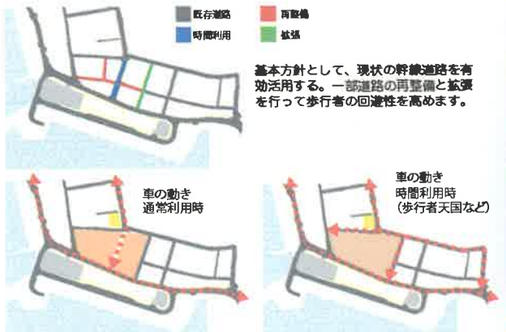


■ 交通機能に関する整備方針　車と人の動き

目的：交通機能に関する整備方針は、歩車分離を推進して、子ども、若年層、高齢者といった多様な世代に優しい「歩いて楽しめる空間」を確保しながら、車道の確保と基本的交通手段としてのバス、タクシー、レンタカーへスムーズな乗り換えを可能とする空間デザインとします。

手法：主に以下６項目に留意して国道と湾岸道路によって分離された港周辺エリアを再整備することで、歩行者、タクシー、乗用車、公共交通（バス）、船舶が集まる新たな交通結節点として整備します。

（１）主要道路（国道４８５号線、及び臨港道路）は既存のまま残します
（２）商業地区の市道は歩道として再整備し小路を新設します
（３）商業街区は人を優先し、基本的に車両の侵入は行わないことにします
（４）立体的な空間利用を行い、ゾーンを超えた移動は３階レベルの移動ルートを確保します
（５）４つ駐車場は既存のまま残します
（６）タクシー、乗用車、公共交通の乗り換え空間を新たに整備します



基本方針として、現状の幹線道路を有効活用する。一部道路の再整備と拡張を行って歩行者の回避性を高めます。

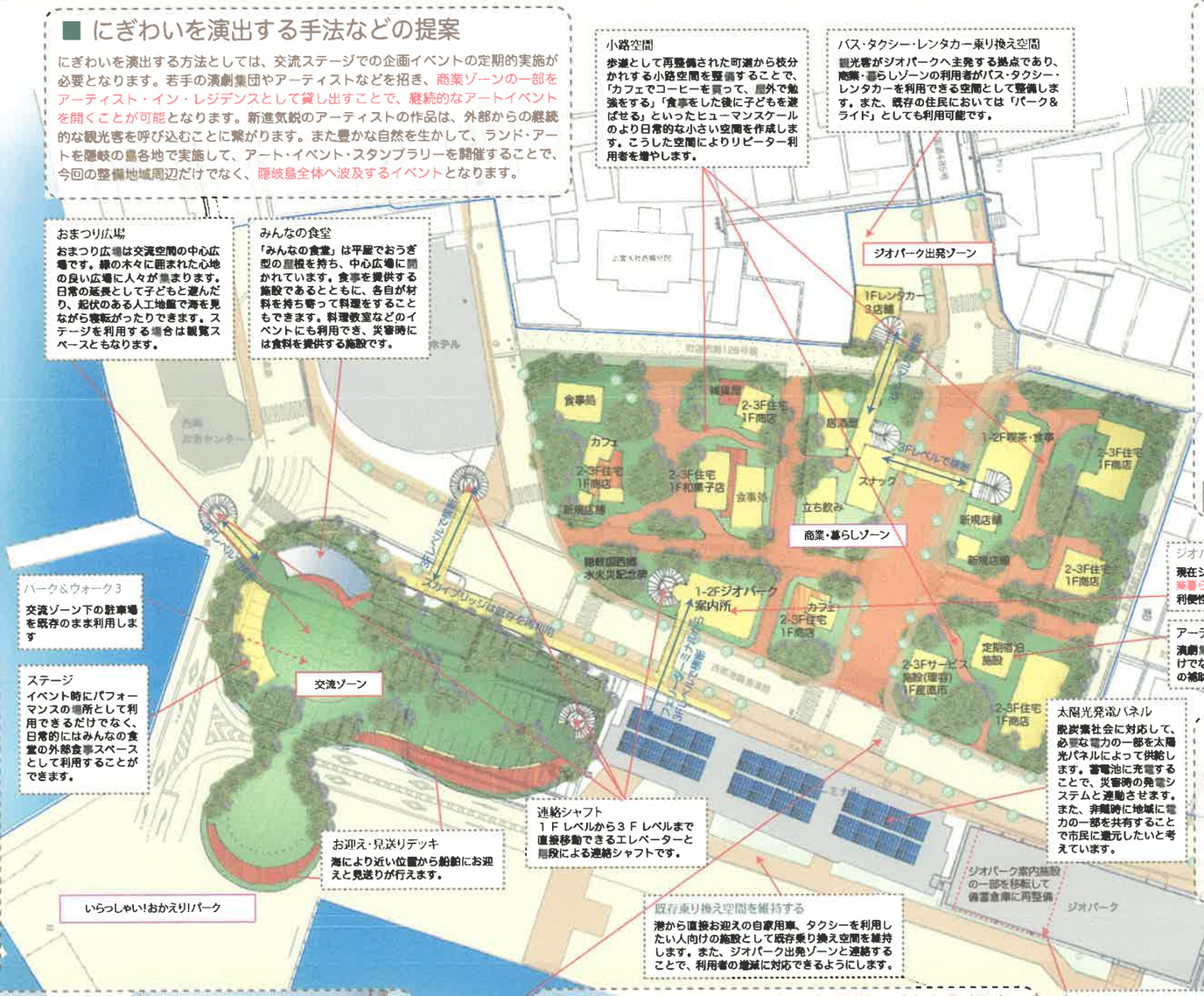
■ 交流機能に関する整備方針

目的：交流機能に関する整備方針は、長期的に「みんなで隠岐の島で幸せに生きる」ことを実現する空間を確保することです。具体的には、交流ゾーンにおける主体を「住民同士」と「住民と観光客」といったカテゴリーに分けるのではなく、多様な世代が交流しながら内部者（島民）と外部者（観光客）が協働してより良い隠岐の島を作っていく「助け合いを促す空間」を目指しています。

手法：「おまつり広場」といったイベントスペースを整備するとともに、多世代が交流し、子ども、子育て世代、高齢者が混じり合う場として、日常的にも利用できる「みんなの食堂」を交流機能の中心に据えます。食事は日常生活の中で、「どういった年齢層」であっても「どんな立場」であっても生きていく上で重要な共通事項です。「同じ釜の飯を食べる」という意識を共有することで、人々の一体感が徐々に育まれます。「みんなの食堂」は子どもや高齢者の食堂といった位置付けでなく、誰でも「食事を助け合う」ことを可能とする新しい食堂形態としたいと思います。「共食」の空間整備を軸に、広場空間、イベント空間を配置し、多世代が交流できる場をつくります。

■ にぎわいを演出する手法などの提案

にぎわいを演出する方法としては、交流ステージでの企画イベントの定期的実施が必要となります。若手の演劇集団やアーティストなどを招き、商業ゾーンの一部をアーティスト・イン・レジデンスとして貸し出すことで、継続的なアートイベントを開くことが可能となります。新進気鋭のアーティストの作品は、外部からの継続的な観光客を呼び込むことに繋がります。また豊かな自然を生かして、ランド・アートを隠岐の島各地で実施して、アート・イベント・スタンプラリーを開催することで、今回の整備地域周辺だけでなく、隠岐島全体へ波及するイベントとなります。



おまつり広場
おまつり広場は交流空間の中心広場です。緑の木々に囲まれた心地の良い広場に人々が集まります。日常の延長として子どもと遊んだり、起伏のある人工地盤で海を見ながら寝転がったりできます。ステージを利用する場合は観覧スペースともなります。

みんなの食堂
「みんなの食堂」は平屋でおうぎ型の屋根を持ち、中心広場に開かれています。食事を提供する施設であるとともに、各自が材料を持ち寄って料理をすることもできます。料理教室などのイベントにも利用でき、災害時には食料を提供する施設です。

小路空間
歩道として再整備された町道から枝分かれする小路空間を整備することで、「カフェでコーヒーを買って、屋外で勉強をする」「食事をした後に子どもを遊ばせる」といったヒューマンスケールのより日常的な小さい空間を作成します。こうした空間によりリピーター利用者を増やします。

バス・タクシー・レンタカー乗り換え空間
観光客がジオパークへ主発する拠点であり、商業・暮らしゾーンの利用者がバス・タクシー・レンタカーを利用できる空間として整備します。また、既存の住民においては「パーク＆ライド」としても利用可能です。

パーク＆ウォーク３
交流ゾーン下の駐車場を既存のまま利用します

ステージ
イベント時にパフォーマンスの場所として利用できるだけでなく、日常的にはみんなの食堂の外部食事スペースとして利用することができます。

お迎え・見送りデッキ
海により近い位置から船舶にお迎えと見送りが行えます。

連絡シャフト
１Ｆレベルから３Ｆレベルまで直接移動できるエレベーターと階段による連絡シャフトです。

既存乗り換え空間を維持する
港から直接お迎えの自家用車、タクシーを利用したい人向けの施設として既存乗り換え空間を維持します。また、ジオパーク出発ゾーンと連絡することで、利用者の増減に対応できるようにします。

太陽光発電パネル
脱炭素社会に対応して、必要な電力の一部を太陽光パネルによって供給します。蓄電池に充電することで、災害時の発電システムと連動させます。また、非常時に地域に電力の一部を共有することで市民に還元したいと考えています。

ジオパーク・インフォメーション
現在ジオパークにある案内所機能の一部を商業・暮らしゾーンに移転します。観光客が交流ゾーンから商業暮らしゾーンにアクセスする最初の建物に案内所機能を設置することで情報発信を加速させ、観光客の利便性を高めます。

アーティスト・イン・レジデンス
演劇集団やアーティストなどの滞在施設とします。商業・暮らしゾーンに位置することで、アート作品だけでなくアーティスト自身が住民との密接な交流を行えるようにします。子どもなどへのアート教室などの補助を推進することで住民へも文化的な還元ができるようにします。

ジオパークの一部を移転して備蓄倉庫に再整備

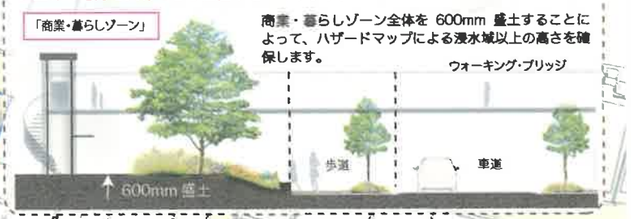
パーク＆ウォーク１・２・３
駐車場（３カ所）と自転車置場はすべて既存のまま利用します。利用者は駐車場に車を入れたのちに、整備された歩道を利用します。交流ゾーンの下にある駐車場からは連絡シャフトで直接「交流ゾーン」にアプローチすることもできます。

備蓄倉庫
ジオパーク・インフォメーションに移動した施設部分を備蓄倉庫として活用する。食料や保存水などの備蓄食料に加え、投光器や発電機などの応急資機材を保管します。

■ 防災に関する整備方針

防災に関する整備方針は、「命と生活を守る」ことを第一に、交流ゾーンを一次防災拠点とすることで、安全な高所への速やかな移動を可能とすることです。その後、商業・暮らしゾーンを二次的防災拠点として、交流ゾーンから浸水域を通らずに安全な地域へ移動可能します。

また、災害時の事業継続計画（BCP＝Business Continuity Plan）を策定することで、商業地域として自然災害から早期復旧できる空間にします。そのために、防災備蓄倉庫、最低限の自家発電設備を確保します。また、既存のターミナルビルの上や交流ゾーンにも太陽光発電設備を設けることで、建物単体ではなく、４つのゾーン全体で電力を共有できる仕組みをつくります。



商業・暮らしゾーン全体を 600mm 盛土することによって、ハザードマップによる浸水域以上の高さを確保します。

■ その他　まちづくりの継続に向けて

本提案の完了後も隠岐の島で継続的なまちづくりを実施できるように、地元の若手中心のまちづくり組織（NPO）を形成して、様々なアイデアを具現化して実施できる柔軟な体制づくりを行います。また、現在のリモートワークが今後さらに推進されることを先取りして、リモートで活動しやすい職種（例えば、「プログラマー」「アプリ開発者」「WEB デザイナー」などの IT 関係が中心となる）の人が、自然豊かな土地（隠岐ユネスコ世界ジオパーク）で仕事がしやすい環境（ワーケーション）を整備します。これにより、世界中から人々を呼び込むことができます。

■ 各機能の連携を深めるための手法に対する提案

各機能の連携を深めるための手法に対する提案としては、「歩車分離」と「歩いて楽しめる空間」の形成が肝となります。立体的な歩行空間を形成することで、「交流ゾーン」「暮らし・商業ゾーン」「ジオパーク出発ゾーン」を物理的に連携させます。これまで船舶を中心としたターミナル施設は船着場が始発であり終点となっており、ここから直接、車、タクシー、バスなどによって移動する必要がありました。本提案では、船着場からの歩行空間を整備することで、車にたどり着くまでの間に「商業・暮らしゾーン」や「交流ゾーン」を経由することを促します。こうした施策により、各ゾーンに分散する暮らしのソフト機能の連携を可能とさせます。

■ 整備する施設の利活用や運営に対する提案

住民の協働を促すための拠点「みんなの食堂」を「交流ゾーン」に整備した後、交流ゾーンの利活用プランを継続的に検討するための組織の設置と、それをサポートする行政の連携が必要となります。ポートプラザ、お魚センターなどの既存の機能を保存しながら、「おまつり広場」や「みんなの食堂」の機能と連携させる「食」をテーマとする体験型イベントを開きます。ジオゲートウェイにある「隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会」の窓口的機能は、「商業・暮らしゾーン」内に移転することで、観光客の利便性を高めます。

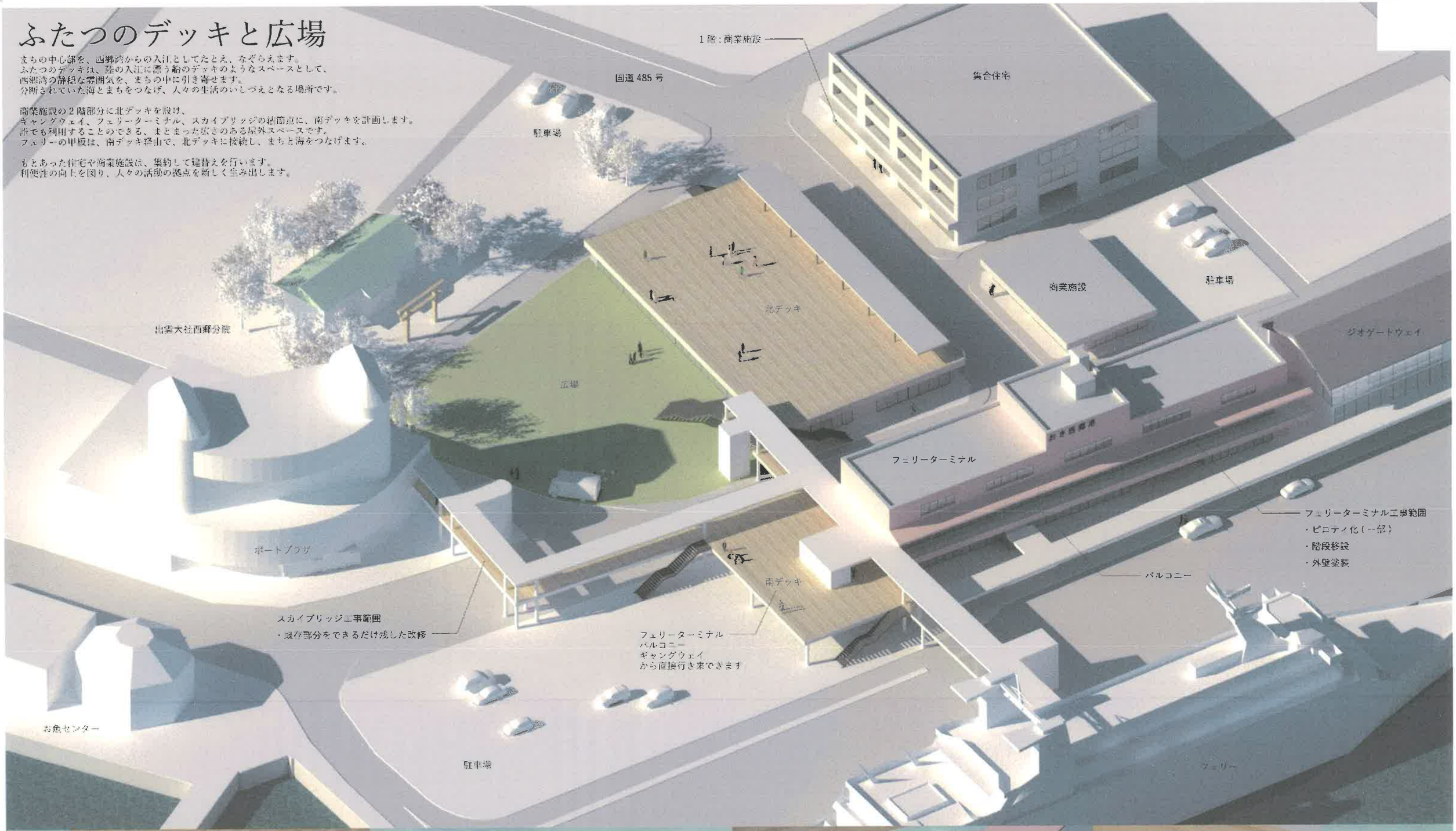
隠岐の島町西郷港周辺地区 平面図 1/700

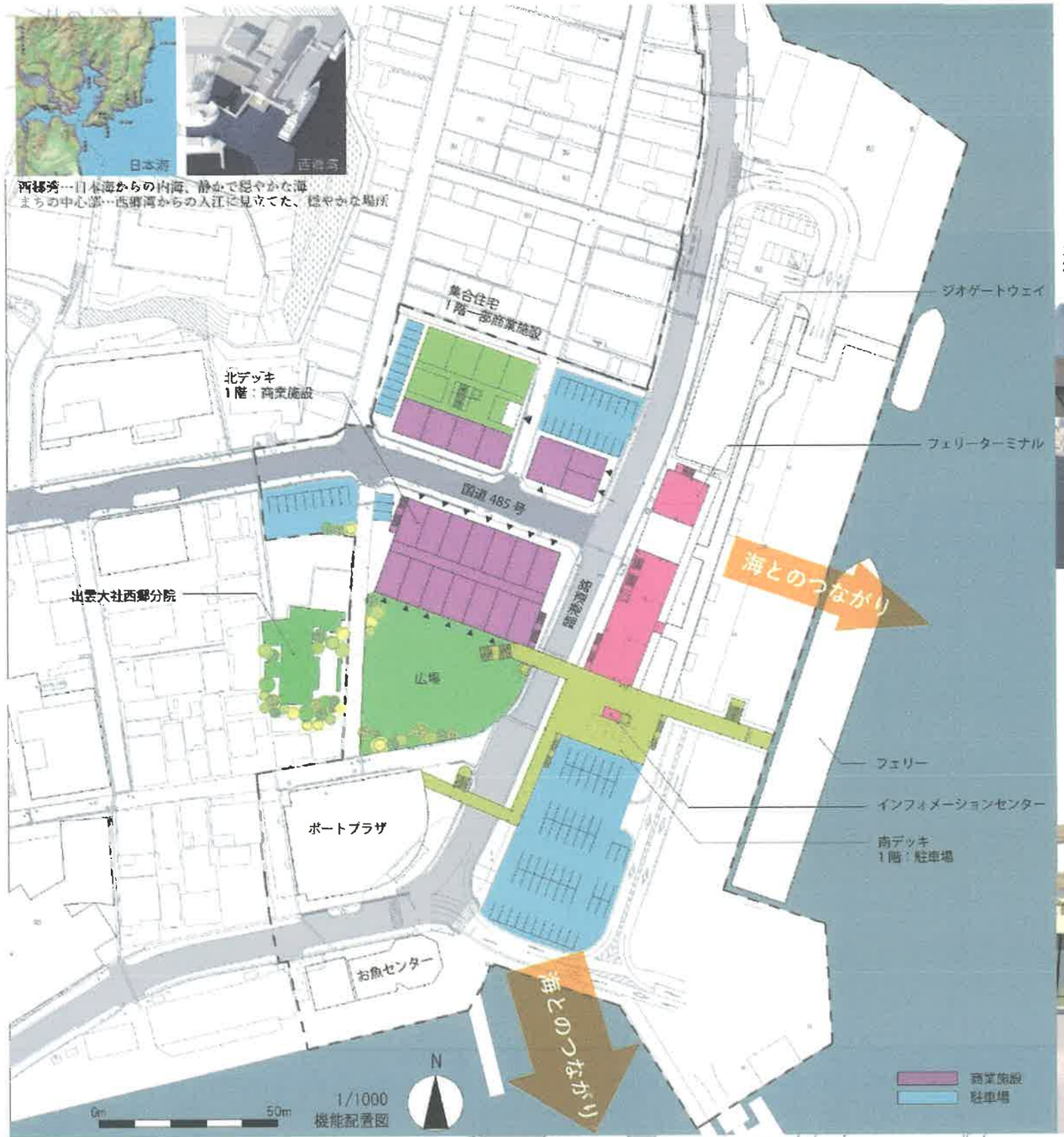
ふたつのデッキと広場

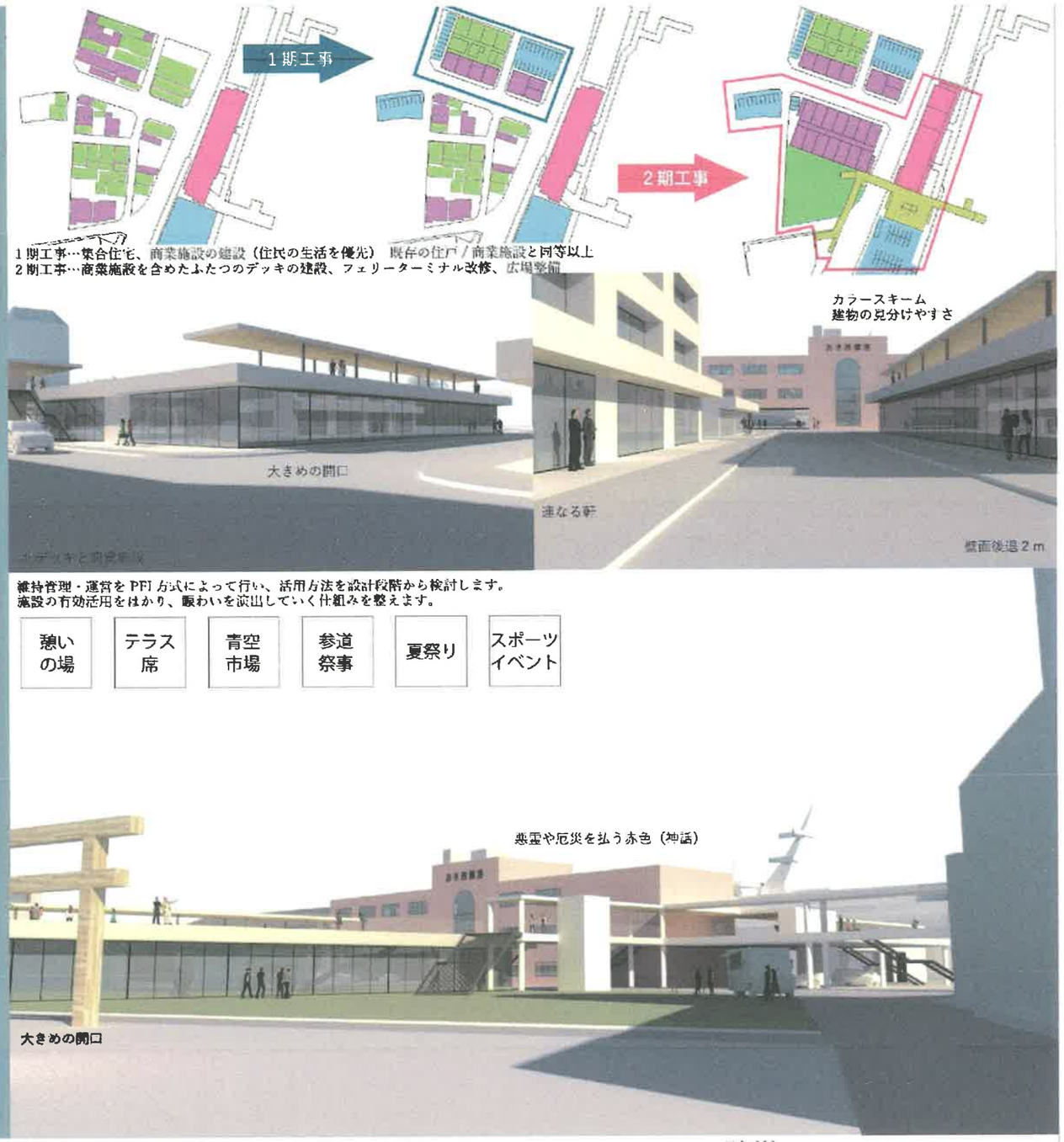
まちの中心部を、西郷湾からの入江としてたとえ、なぞらえます。
ふたつのデッキは、陸の入江に漂う船のデッキのようなスペースとして、
西郷湾の静穏な雰囲気を、まちの中に引き寄せます。
分断されていた海とまちをつなげ、人々の生活のいしずえとなる場所です。

商業施設の２階部分に北デッキを設け、
ギャングウェイ、フェリーターミナル、スカイブリッジの結節点に、南デッキを計画します。
誰でも利用することのできる、まとまった広さのある屋外スペースです。
フェリーの甲板は、南デッキ延伸で、北デッキに接続し、まちと海をつなげます。

もとあった住宅や商業施設は、集約して建替えを行います。
利便性の向上を図り、人々の活動の拠点を新しく生み出します。



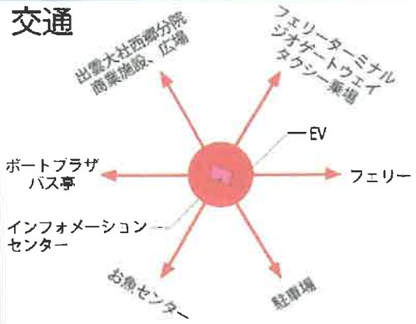




維持管理・運営を PFI 方式によって行い、活用方法を設計段階から検討します。
施設の有効活用をはかり、賑わいを流出していく仕組みを整えます。

憩いの場	テラス席	青空市場	参道祭事	夏祭り	スポーツイベント

交通



南デッキに、インフォメーションセンターを設け、交通拠点とします。既存施設を含め、シンプルでわかりやすい、基点型の都市動線として整理します。

交流

ふたつのデッキと広場は、まちの中心に位置し、各施設に取り囲まれるように計画します。観光客がにじめに訪れる場所であり、まちの人々の交流空間にもなります。ブリッジや階段でつながり、様々な居場所を用意します。

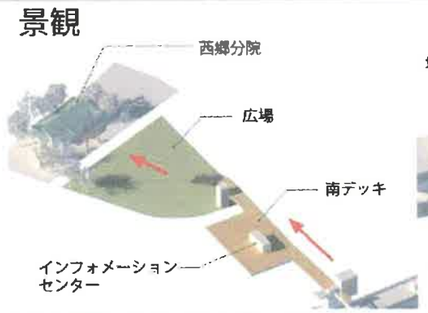
商業

国道 485 号と臨港道路に直接面する商業施設は、賑わいを創出し、まちの中心部の求心力を高めます。テナント 1 戸あたり約 80 ㎡とし、道路又は広場から直接出入りします。広場に拡張した利用もできます，住人、観光客どちらにも利用しやすい施設です。

暮らし

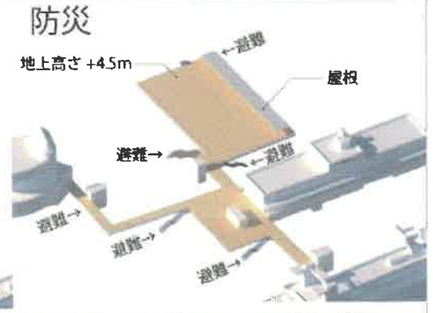
集合住宅化することで、コミュニティを活性化し、行政サービスの効率化をはかります。商業施設、駐車場へのアクセスもよく、コンパクトで暮らしやすい環境を整えます。駐車場は、移動販売や巡回検診車両の拠点としても役立ちます。

景観



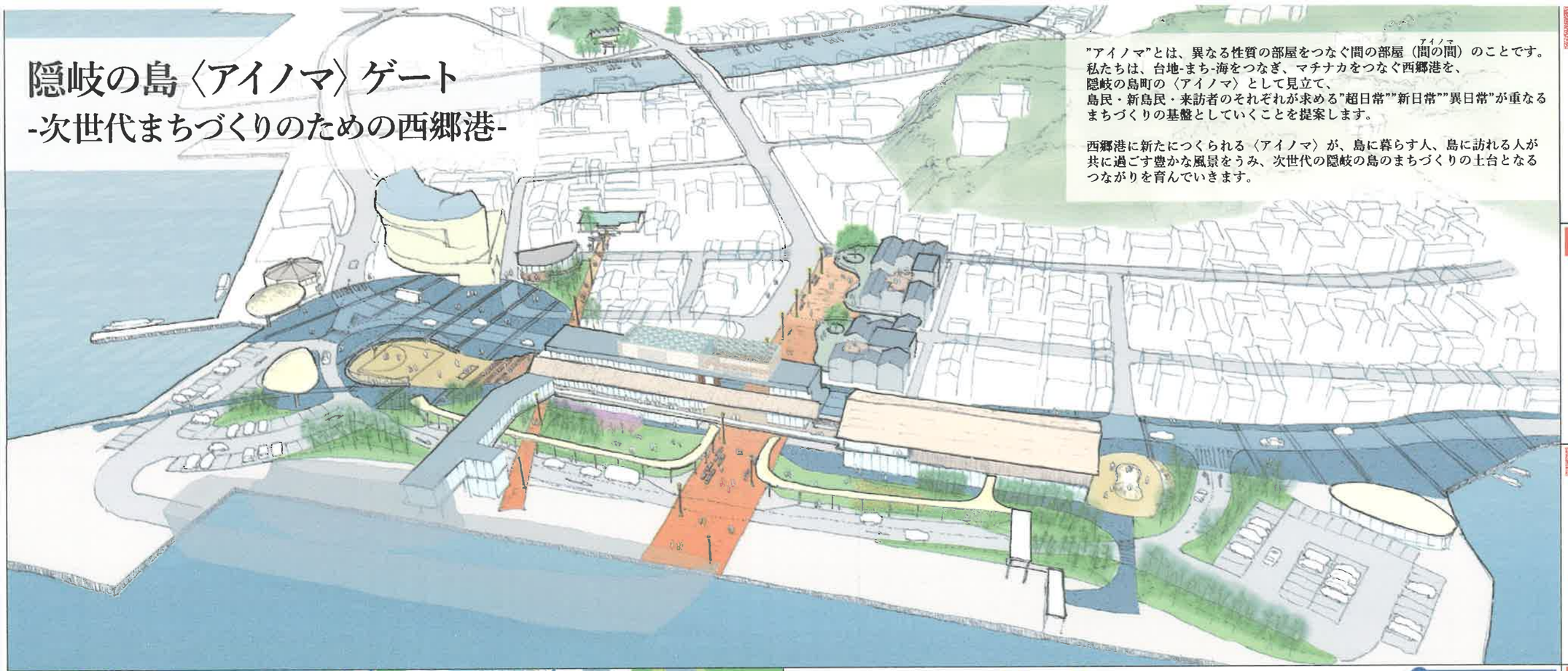
「新たな参道」として、ギャングウェイから西郷分院までの動線をつなげます。アプローチは島の顔として、観光客を迎える玄関口の役割を持ちます。海からつながる島への導入体験は、人々の心に残る風景となります。

防災



ふたつのデッキは、地上高さ 14.5m程度に計画し、水害時の避難場所となります。全方向から容易に避難して来られるように、階段を周囲に計画します。災害時に、ポートプラザ、フェリーターミナルとの連携も可能です。

隠岐の島〈アイノマ〉ゲート
-次世代まちづくりのための西郷港-



"アイノマ"とは、異なる性質の部屋をつなぐ間の部屋（間の間（アイノマ））のことです。
私たちは、台地-まち-海をつなぎ、マチナカをつなぐ西郷港を、
隠岐の島町の〈アイノマ〉として見立て、
島民・新島民・来訪者のそれぞれが求める"超日常""新日常""異日常"が重なるまちづくりの基盤としていくことを提案します。

西郷港に新たにつくられる〈アイノマ〉が、島に暮らす人、島に訪れる人が共に過ごす豊かな風景をうみ、次世代の隠岐の島のまちづくりの土台となるつながりを育んでいきます。

1.提案趣意(デザインコンセプト)

隠岐の島〈アイノマ〉ゲート -次世代まちづくりのための西郷港-

西郷港周辺整備事業が隠岐の島の新しい玄関口としての景観をつくり、次世代まちづくりの基盤となるよう、私たちは下記の3つの提案をおこないます。
①海と街がつながる新しい港の風景〈ゲート〉をつくる
②地域とつながるまちづくりの基盤〈アイノマ〉をつくる
③隠岐の島の資源を地域の将来ヴィジョンとしてつなげる〈西郷デザインノート〉

新しく整備された西郷港で、島に暮らす人、島に訪れる人が共に過ごす風景により、次世代の隠岐の島のまちづくりの土台となるつながりを育んでいきます。

2.エリア全体の機能配置(ゾーニング)

既存施設をつなぎなおし新しい港の景観をつくる

西郷港周辺地区にこれまで整備された様々な観光・交流施設同士、街区と港をつなぎなおし、うみとまちが一体となった新しい港の景観をつくります。大きな機能配置は現状のものをいかしつつ、緑とオープンスペースでつなぎ直し街路や広場を島に暮らす人と訪れる人がともに行き交い過ごせる豊かな空間に生まれ変わらせます。

3.提案趣意に関する補足説明方針

西郷港周辺地区と島をつなぐみちづくり

西郷港周辺地区をマチナカ（港町、西町、中町、東町）を巡る散策ルートと、島の自然（ジオパーク）を巡る公共交通・ドライブルートの起点に位置づけ、ターミナル周辺の交通機能を集約します。臨港道路はシェアドスペース（歩車共存道路）の導入を検討することで、うみとまちをつなぐオープンスペースとしての役割を持たせます。

4.交流機能に関する整備方針

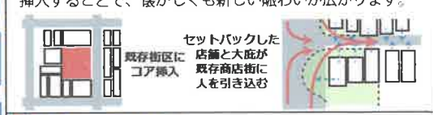
地域とつながるまちづくりの基盤〈アイノマ〉

西郷港周辺地区の利用者であり、まちづくりの担い手である「島民」「新島民」「来訪者」のそれぞれが求める新しい「日常以外の環境」が重なる場として隠岐の島の〈アイノマ〉を提案します。既存施設を活用しながら、豊かな文化をもつ地域とつながる新しい西郷港周辺地区は、「食、人、モノ、コト、学、働」の様々な活動を行う人々が共に同じ空間を共有する交流の場となります。

5.商業機能に関する整備方針

まちとつながるアイノマのなりわい空間

ターミナルを改修し街側の顔はガラスファサードの店舗として、臨港道路沿いに街と港につながる店舗空間をつくりだします。街区の建物は既存を活かしつつ、部分的に改修してアイノマの新しい取り組みを受け入れます。街区全体は既存を踏襲し分棟形式で更新し、国道軸に面する北側街区は一体で開発する際は長屋形式とします。街路に面した側にファサードを向け、店舗やバックヤードとなるコアを挿入することで、懐かしくも新しい賑わいが広がります。



6.暮らし機能に関する整備方針

新しい商業・生活を支える街区改修

西郷港周辺地区はターミナルや商業地と隣接するポテンシャルの高い商業・居住エリアでありながら駐車場と一体となった新規整備の難しさなどから十分に活用されていません。現居住者と新規居住者の住まいに加え、アイノマの機能をもつ新しい商業・生活を支える街区改修を行い、立地を最大限生かしたまちづくりの基盤を整備します。

■西郷デザインノート

デザインノートとは？
地域の歴史/資源/活動/将来計画などを一つの絵に将来目指すまちの姿として描くものです。みなさんで作成・更新して個々の事業や活動の連携に活用します。

【歴史】
川や台地に沿ったみちを中心に北前船で栄えた各集落

かつて西郷は北前船の寄港地/風待港として、歌/踊り/石州瓦などの文化が持ち込まれた。神社を中心に、川や台地に沿う道沿いに寄港地の宇屋町・行政中心の目貫村・武家屋敷の八尾村の3集落が発展した。

【現状】
港周辺に点在する公共施設とまちのつながりの欠如

融振法以降に海岸部分は埋立造成が行われ、西郷港周辺地区も公共施設整備が進んだ。現状ではそれらの機能の連携が不十分なため、日常のまちの暮らしと離れている。

■地域資源の例

西郷港周辺地区は、港と各ルートをつなぐ重要な交流・交通拠点となります。特にうみ・まち通りや〈うみ・舞台〉市庭ゾーンは『軸』と「結節点」の役割を担います。

マチナカ散策ルート（徒行者動線）
島巡りルート（広域中距離動線）
川と台地を繋ぐ道
駐車場
遊覧船航路
バス停
バスルート
マチナカ拠点
神社
川祭りを共同で開催する神社
視点場
宿泊施設
飲食店
公共施設
寺院
銀行・郵便局

■〈アイノマ〉プログラム

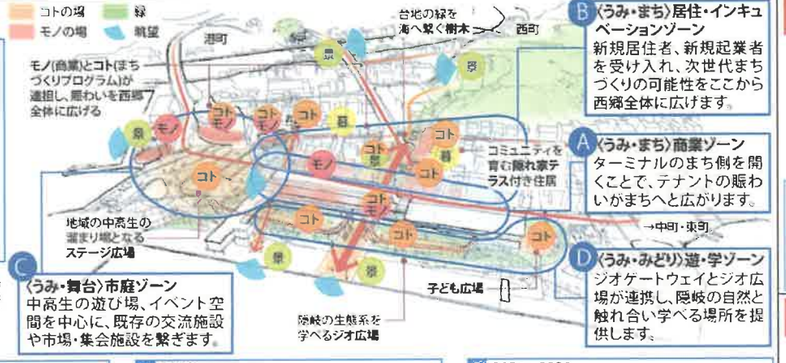
属性別の課題感

島民→ コミュニティ帰属は大事だけれど少し解放されたい瞬間もある
→ "超日常"の場への憧れ

新島民→ 移住して間もない時に孤立感…コミュニティに加わるきっかけが欲しい
→ "新日常"へのスムーズなスタート

来訪者→ sightseeingからjourneyへ 従来の見物型観光ではつまらない
→ "異日常"への憧憬

コト・モノ・食・働・住・学・遊のテーマ別に、島民の超日常、新島民の新日常、来訪者の異日常が形成され、それぞれが繋がり、アイノマが醸成されていくステップと、それを支える体制を提案します。



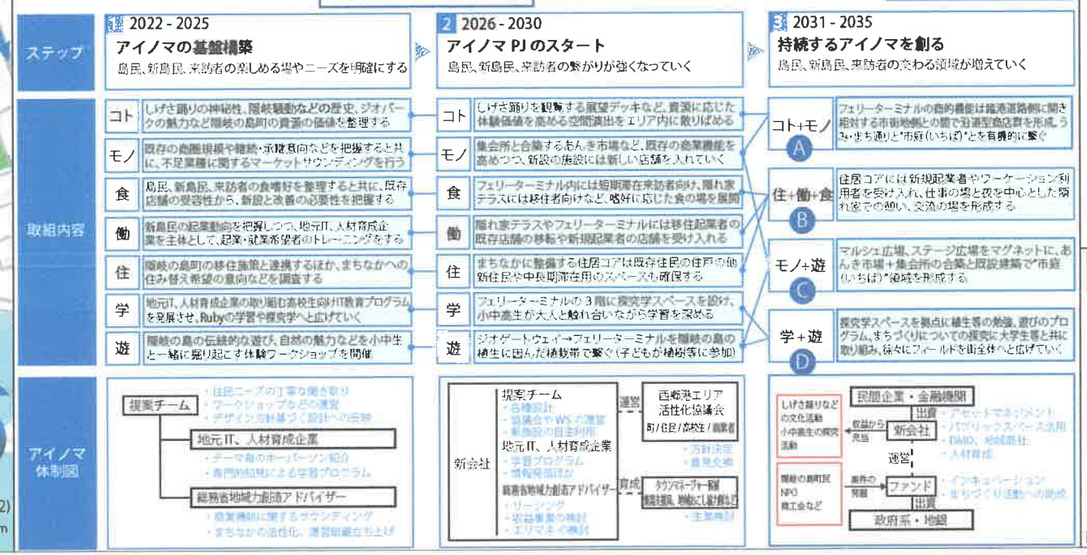
A〈うみ・まち〉商業ゾーン
ターミナルのまち側を開くことで、テナントの賑わいがまちへと広がります。

B〈うみ・まち〉居住・インキュベーションゾーン
新規居住者、新規起業者を受け入れ、次世代まちづくりの可能性をここから西郷全体に広げます。

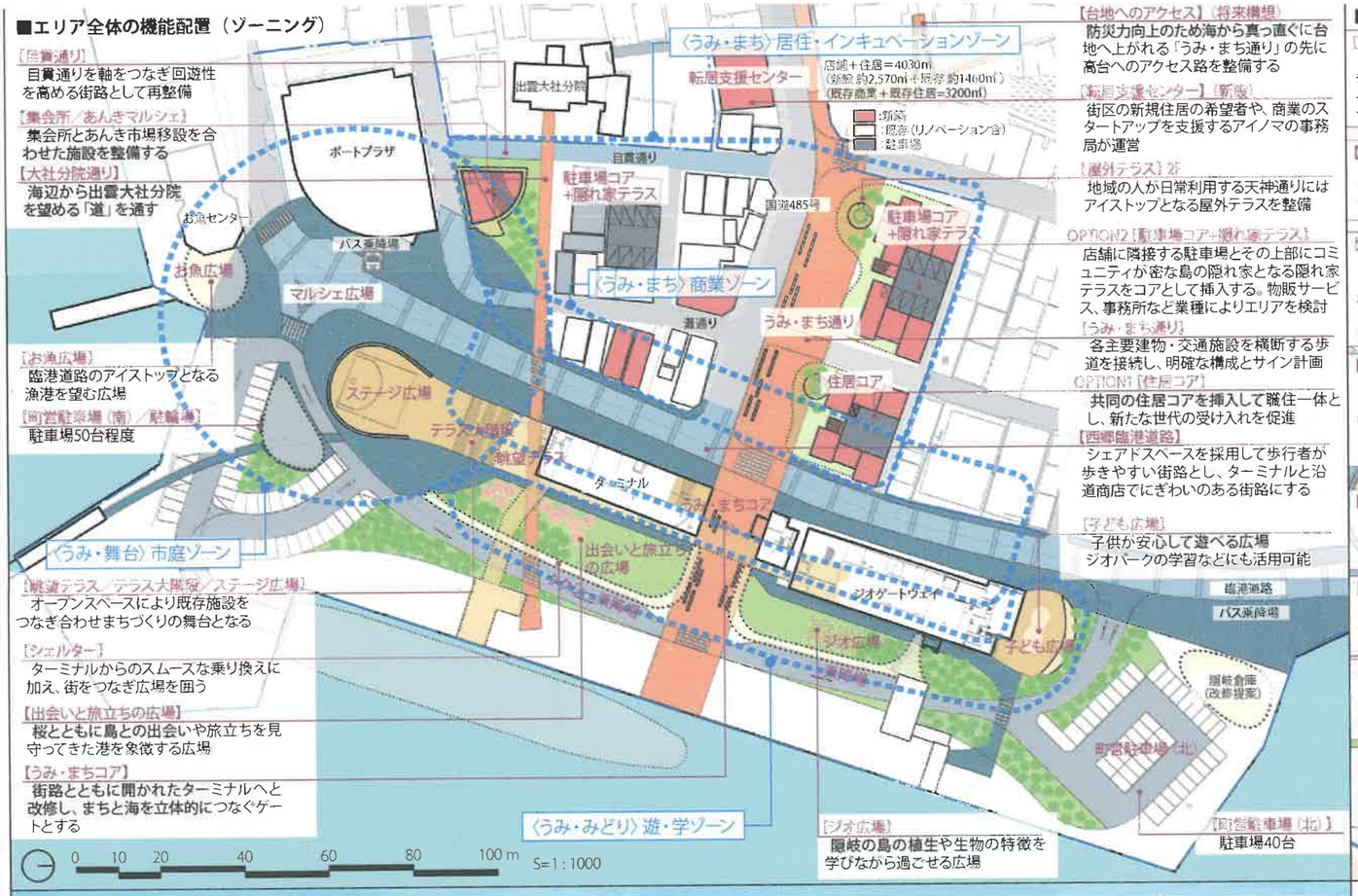
C〈うみ・舞台〉市庭ゾーン
中高生の遊び場、イベント空間を中心に、既存の交流施設や市場・集会施設を繋ぎます。

D〈うみ・みどり〉遊・学ゾーン
ジオゲートウェイとジオ広場が連携し、隠岐の自然と触れ合い学べる場所を提供します。

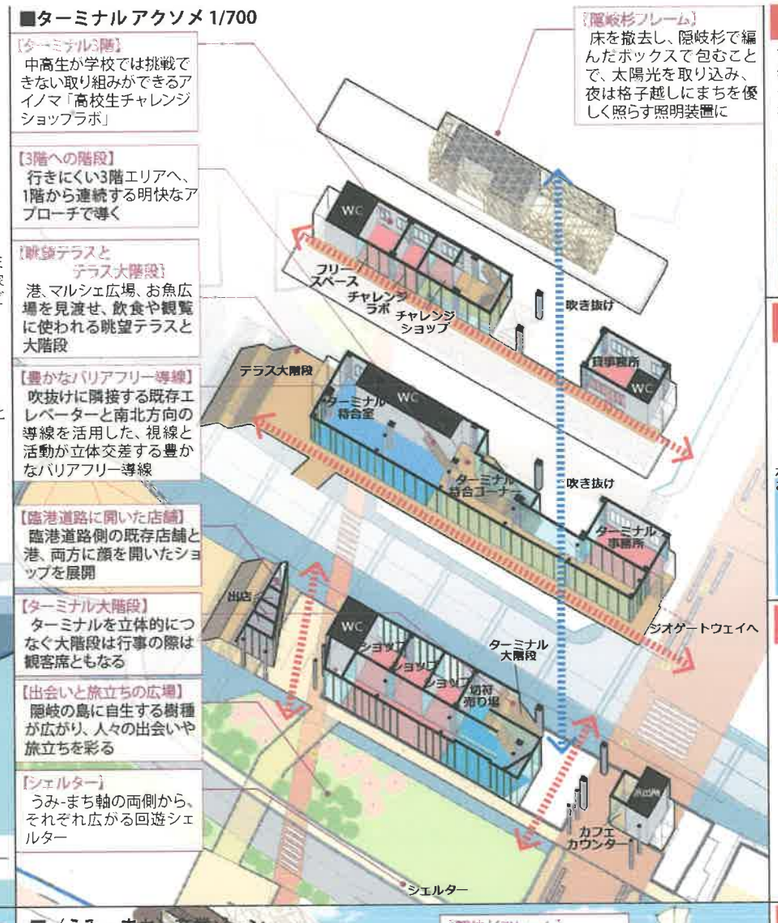
	1 2022 - 2025	2 2026 - 2030	3 2031 - 2035
ステップ	**アイノマの基盤構築** 島民、新島民、来訪者の楽しめる場やニーズを明確にする	**アイノマ PJのスタート** 島民、新島民、来訪者の繋がりが強くなっていく	**持続するアイノマを創る** 島民、新島民、来訪者の交わる領域が増えていく
取組内容	コト：しげき踊りの神秘性、隠岐騒動などの歴史、ジオパークの魅力など隠岐の島町の資源の価値を整理する モノ：既存の商圏規模や継続・承継意向などを把握すると共に、不足業種に関するマーケットサウンディングを行う 食：島民、新島民、来訪者の食嗜好を整理すると共に、既存店舗の受容性から、新設と改善の必要性を把握する 働：新島民の起業動向を把握しつつ、地元IT、人材育成企業を主体として、起業・就業希望者のトレーニングをする 住：隠岐の島町の移住施策と連携するほか、まちなかへの住み替え希望の意向などを調査する 学：地元IT、人材育成企業の取り組む高校生向けIT教育プログラムを発展させ、Rubyの学習や探究学へと広げていく 遊：隠岐の島の伝統的な遊び、自然の魅力などを小中生と一緒に掘り起こす体験ワークショップを開催	コト：しげき踊りを観覧する展望デッキなど、資源に応じた体験価値を高める空間演出をエリア内に散りばめる モノ：集会所と合築するあんき市場など、既存の商業機能を高めつつ、新設の施設には新しい店舗を入れていく 食：フェリーターミナル内には短期滞在来訪者向け、隠れ家テラスには移住者向けなど、略好に応じた食の場を展開 働：隠れ家テラスやフェリーターミナルには移住起業者の既存店舗の移転や新規起業者の店舗を受け入れる 住：まちなかに整備する住居コアには既存住民の住戸の他新住民や中長期滞在用のスペースも確保する 学：フェリーターミナルの3階に探究学スペースを設け、小中高生が大人と触れ合いながら学習を深める 遊：ジオゲートウェイ→フェリーターミナルを隠岐の島の植生に囲んだ植栽帯で繋ぐ（子どもが植栽等に参加）	コト+モノ A：フェリーターミナルの商的機能は臨港道路側に開き相対する市街地側との間で沿道型商店街を形成、うみ・まち通りと市庭（いちば）とを有機的に繋ぐ 住+働+食 B：住居コアには新規起業者やワーケーション利用者を受け入れ、仕事の場と夜を中心とした隙れ家での癒い、交流の場を形成する モノ+遊 C：マルシェ広場、ステージ広場をマグネットに、あんき市場＋集会所の合築と既設建築で市庭（いちば）領域を形成する 学+遊 D：探究学スペースを拠点に植生者の勉強、遊びのプログラム、まちづくりについての探究に大学生等と共に取り組み、徐々にフィールドを市全体へと広げていく
アイノマ体制図	提案チーム ・住民ニーズの丁寧な聞き取り ・ワークショップなどの運営 ・デザインなど計画づくり設計への反映 地元IT、人材育成企業 ・テーマ毎のキーパーソン紹介 ・専門的知識による学習プログラム 総務省地域力創造アドバイザー ・産業機能に関するサウンディング ・まちなかの活性化、運営組織立ち上げ	新会社 提案チーム ・合意設計 ・協議会やWSの運営 ・新会社の自主運営 地元IT、人材育成企業 ・学習プログラム ・情報発信など 総務省地域力創造アドバイザー ・リーシング ・収益事業の検討 ・エリアマネの検討 運営：西郷港エリア活性化協議会 町/住民/高校生/商業者 ・方針決定 ・意見交換 育成：タウンマネージャー募集 地域活動系、地域づくり経験者 ・主業検討	民間企業・金融機関 出資 収益から還元 新会社 運営 ・アセットマネジメント ・パブリックスペース活用 ・DMO、地域商社 ・人材育成 しげき踊りなどの文化活動 小中高生の探究活動 隠岐の島町民NPO 商工会など 業界の発展 ファンド ・インキュベーション ・まちづくり活動への助成 出資 政府系・地銀



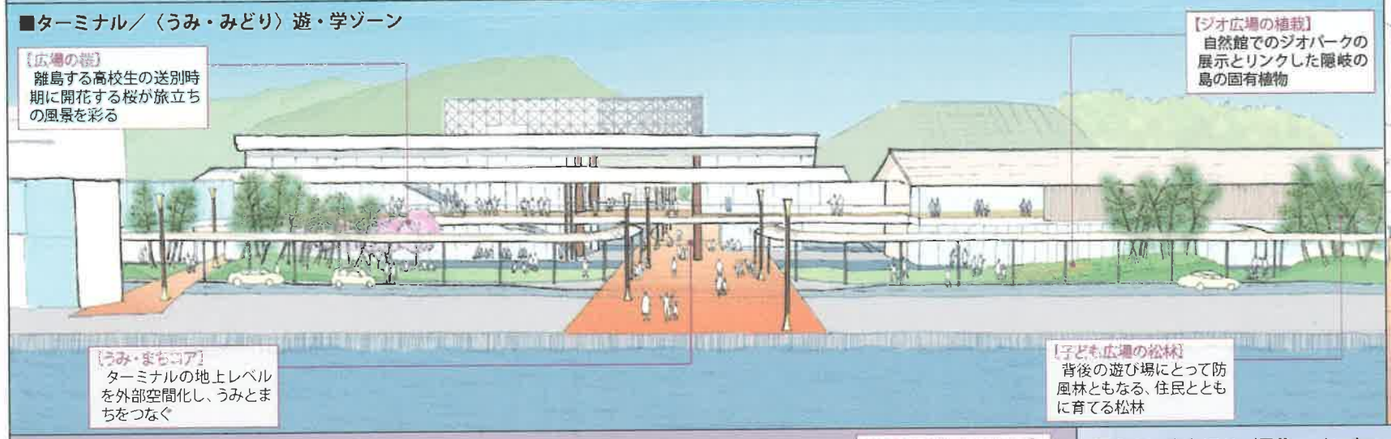
■エリア全体の機能配置（ゾーニング）



■ターミナル アクソメ 1/700

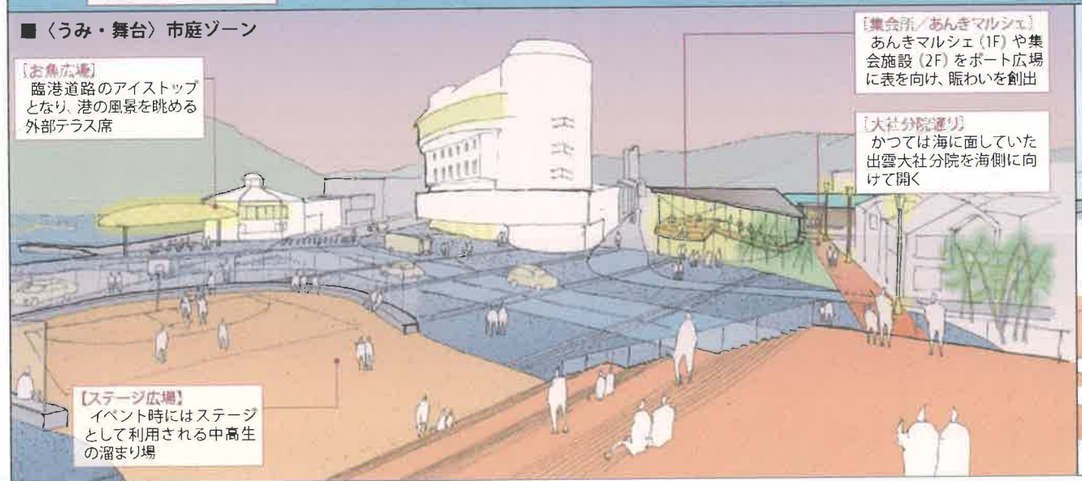


■ターミナル／〈うみ・みどり〉遊・学ゾーン

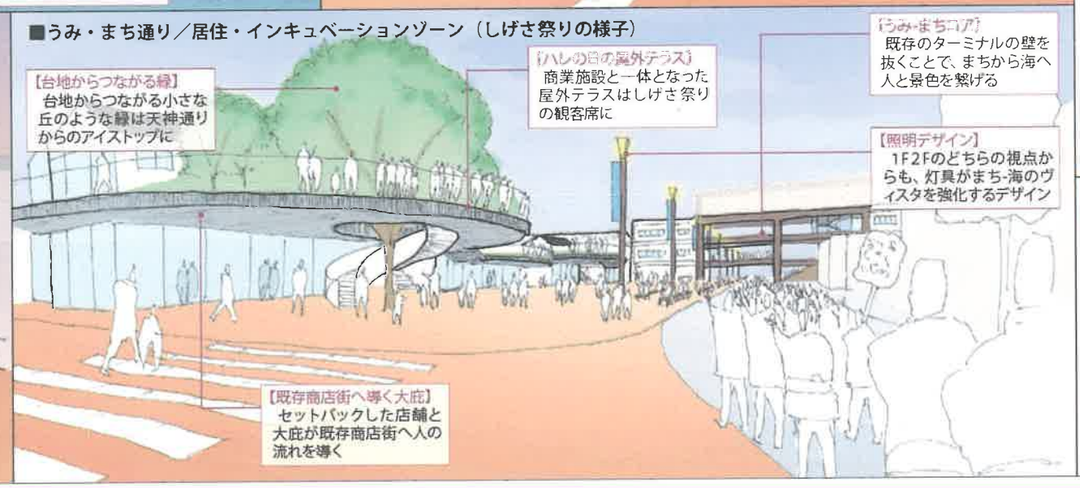


■〈うみ・まち〉商業ゾーン

■〈うみ・舞台〉市庭ゾーン



■うみ・まち通り／居住・インキュベーションゾーン（しげさ祭りの様子）

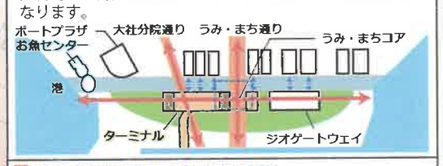


7.景観形成の方針
海と街がつながる新しい港の景観

西郷港周辺地区に、台地の緑が海につながるのひやかな景観とオープンスペースをつくります。景観を形成する屋根やオープンスペースの舗装材に共通して地場産材の活用を検討し、隠岐の島の新しい風景をつくります。また新設、リノベーションともに活動が通りや街に溢み出し、一体的で魅力的な景観を作るよう景観ルールを検討します。

8.西郷港周辺地区デザイン図
ターミナルを中心とした島のゲート＋防災

ターミナルの吹き抜けゲートは、西郷港のエリアや人をつなぎ、海とまちの視線、賑わいの核となります。2つの大階段は、フェリーと街の立体的な回遊性をつくります。大階段は、観覧席など交流の場として活用されるだけでなく、災害時は、街区の大庇テラスやコアと共に、一時避難場となります。

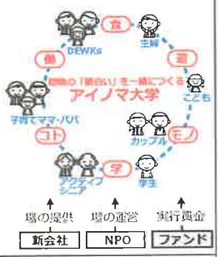


9.各機能の連携を探るための手法に対する提案
デザインノートによるマチナカ連携まちづくり

西郷港周辺の既存施設活用の連携を、オープンスペース整備とアイノマのプログラムを連動して推進します。地域の歴史/資源/活動/将来計画などを地域のヴィジョンとして描く「西郷デザインノート」を各地域の方々とともに作成し、隠岐の島町のまちづくり上の本整備事業の位置付けを明確にするとともに、西郷港の整備を地域全体でのまちづくりに展開していきます。背後のマチナカを含めた広域の案内・サイン計画や地区内の道の整備を進め、日常と有事に機能する公共空間とします。

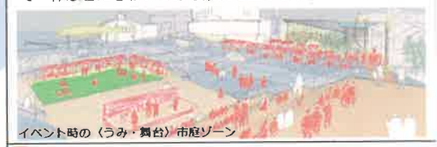
10.整備する施設の利活用や運営に対する提案
まちづくりが育つ仕組みづくり（中間支援組織）

施設利用を促進するためには町民や事業者の皆さんに「ユーザー」ではなく「一緒にいい施設にする（＝育てる）仲間」になって頂く必要があります。運営段階で設立する新会社等が中間支援組織としての役割も担い、皆さんの身近な課題の解決や、様々なアイデアを形にするための学びと実行の場「アイノマ大学」を設立し、一緒に取り組み街の賑わいを創出・持続します。



11.にぎわいを演出する手法などの提案
日常と地域行事の舞台となるオープンスペース

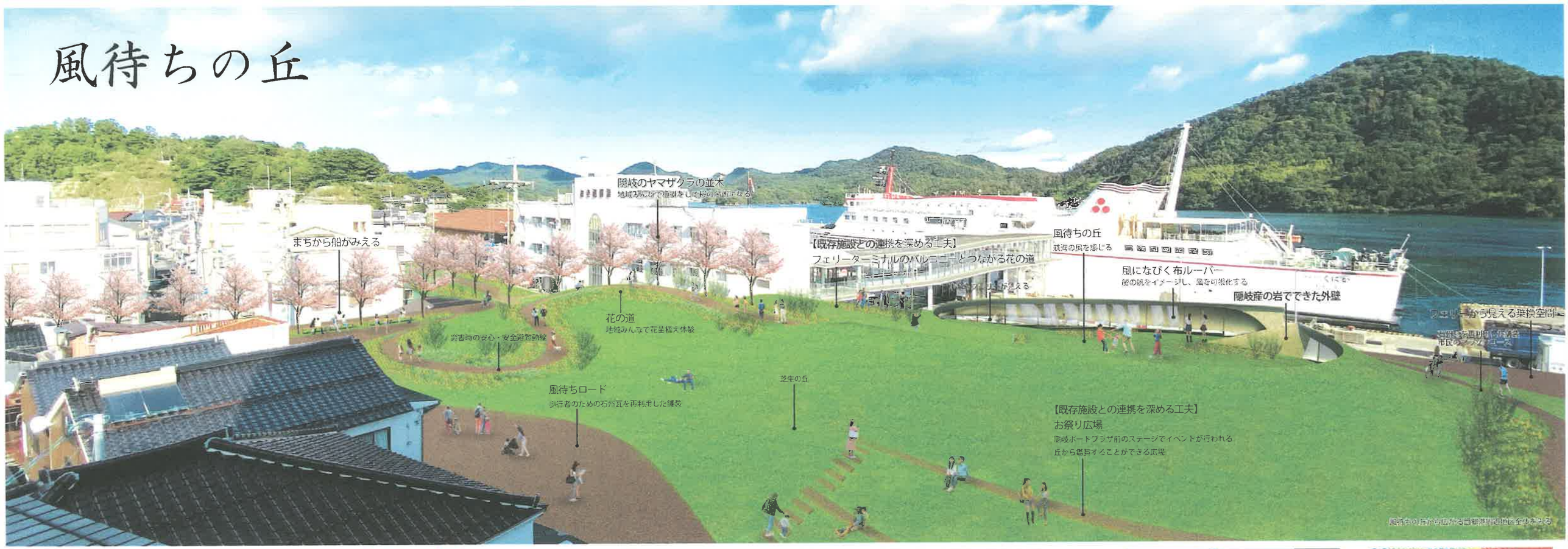
単なる施設整備だけではなく背後の町を含めた、まちづくりとして西郷港の再整備を進めることで、本当に人のいる多様な風景の創出を目指します。うみ・まち通りやポート広場、ステージ広場は日常と地域行事に活用されます。隠岐杉を用いた屋根材やオリジナルの照明によりエリア全体で一体感とにぎわいのある景観を生みます。


イベント時の〈うみ・舞台〉市庭ゾーン

12.その他の提案
台地-まち-うみをつなぐ緑と地場産材でつなぐ

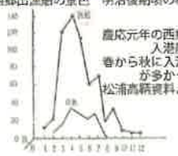
台地から海へと連なる〈うみ・みどり〉遊・学ゾーンの緑は、地域の人と協力してつくり育てていきます。生育が難しく時間がかかる海沿いの植栽を、樹種選定や植栽WSなどを地元の植栽業者さんや小中学生とともに行い、地域の人が主体となって関わる場としていきます。木組みフレームやストリートファニチャーには積極的に地場産の隠岐杉を用いることで、地場の林業との連携を図ります。

風待ちの丘

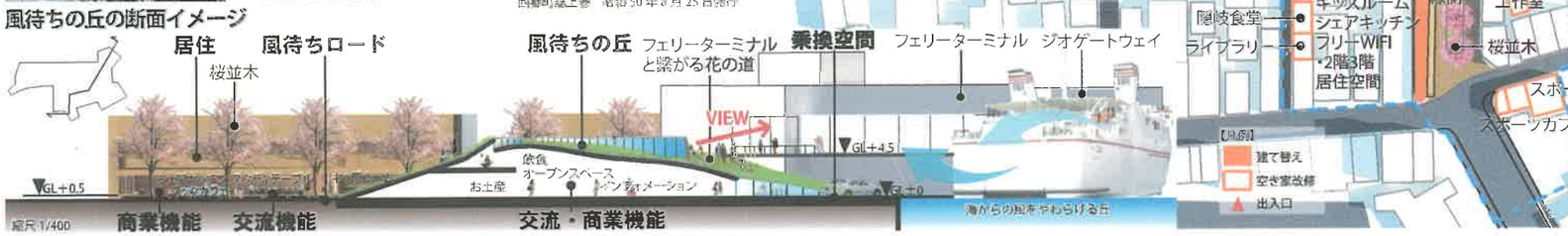


隠岐の風の歴史を未来につなぐ

かつて日本海諸港と大阪を結ぶ西廻り海運の発達により、船乗りの休憩地であった西郷港。
日本海に発達する東、西の風が吹く航海の時期まで船乗りは港で風待ちをしました。
隠岐に独自の文化をもたらし港が繁栄し、人々へ活力を生んだ航海の風を受けとめる玄関口、「風待ちの丘」をつくります。
そこは隠岐にたどり着いた人々や隠岐で暮らす人々が沖乗り航海の風を通して当時の文化を肌で感じ、人々に受け継がれる風の歴史を未来へつなぐ場になります。



風待ちの丘の断面イメージ



風待ちロード

北前船は東の風、西の風を受けて出港し、冬期は風待ち港として休業状態の機能を持たせた。
西郷町誌上巻　昭和50年8月25日発行

くだりま、のぼりま

隠岐における交通の要件によると隠岐の国は上り船のぼりまと下り船くだりまの二つに分かれ、上りは東風を受けて、下りは西風を受けて出港し、西に港を開いた港は上り船、東に港を開いた港は下り船、西廻りのように東西の風のはっきりした港は東西に上り船、西廻りの下り船となって、船を乗り「のぼりま」「くだりま」の名で呼ばれている。

沖乗り

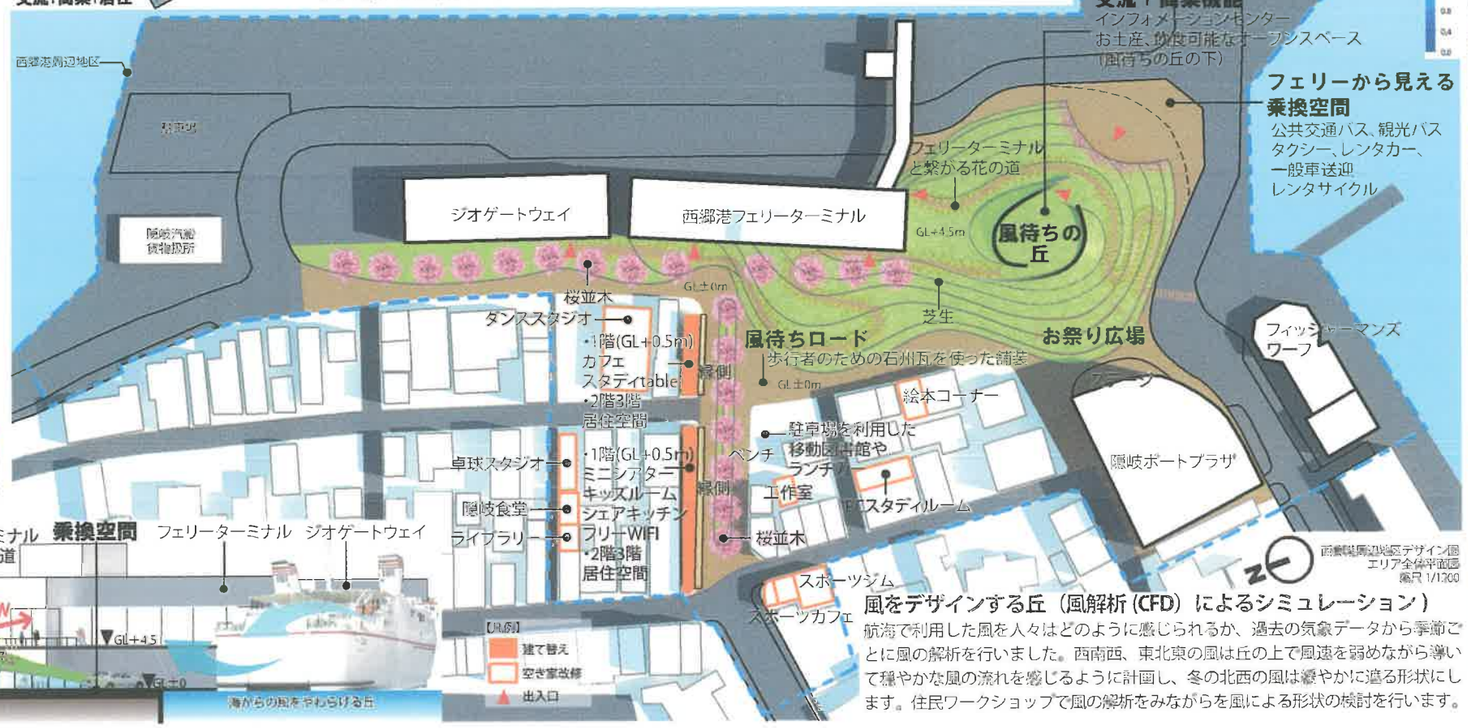
隠岐は島後の周囲が岩礁に囲まれ、また、北西の風が吹き荒れるなどの理由から、港の数は少なく、港の数は、中世の時期から、海から陸までの平野部に集中していた。
もっともこの沖乗りは日本海に発達する東、西の風を利用する航海であるから、船舶の時期が春から秋までの平年の時期に限定され、冬期はもっぱら陸路であった。
隠岐における交通の要件によると隠岐の国は上り船のぼりまと下り船くだりまの二つに分かれ、上りは東風を受けて、下りは西風を受けて出港し、西に港を開いた港は上り船、西廻りのように東西の風のはっきりした港は東西に上り船、西廻りの下り船となって、船を乗り「のぼりま」「くだりま」の名で呼ばれている。

風待ちの丘

隠岐の諸島が統治を受けるようになったのは、全国的に、西廻り海運が盛んになり、港が整備されて、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられた。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。
港は、島後の西郷港から、隠岐の国の中心地として位置づけられたからで、外部の影響による商品流通の休憩地として、港が設けられたからである。

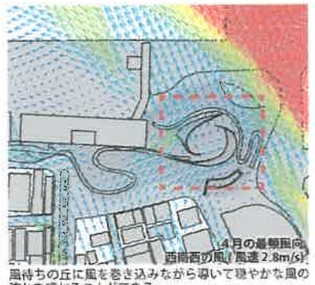
エリア全体の機能配置【交通・交流・商業・暮らし機能の整備方針】

フェリーターミナル南に2階から連絡できる風待ちの丘（高さ GL+ 約4.5m）をつくり、その下に交流・商業機能を配置します。そこから公共バスなどの交通機能へ行き来できる乗換空間を配置します。風待ちの丘を巡るように隠岐の花の道からまちへつながり、災害時の避難動線になります。町道の一部廃止と住居・商店の移転を行い、まちから風待ちの丘やフェリーが見えるようにし、国道485号線や臨港道路の一部は歩行者のための隠岐ヤマザクラの並木道「風待ちロード」にします。空き家を改修・建替えを行い交流、商業、居住機能をまちに分散させ、既存の商店と共にまちを散策しながら滞在できる場をつくります。

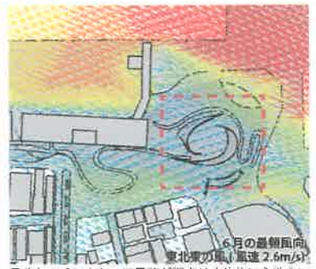


風をデザインする丘（風解析（CFD）によるシミュレーション）

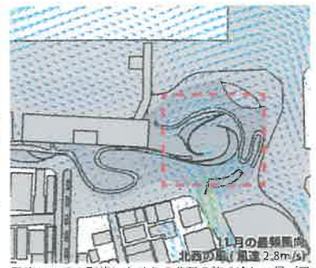
航海で利用した風を人々はどのように感じられるか、過去の気象データから季節ごとに風の解析を行いました。西南西、東北東の風は丘の上で風速を弱めながら導いて穏やかな風の流れを感じるように計画し、冬の北西の風は穏やかに遮る形状にします。住民ワークショップで風の解析をみながらを風による形状の検討を行います。



風待ちの丘に風を巻き込みながら導いて穏やかな風の流れを感じることができる。



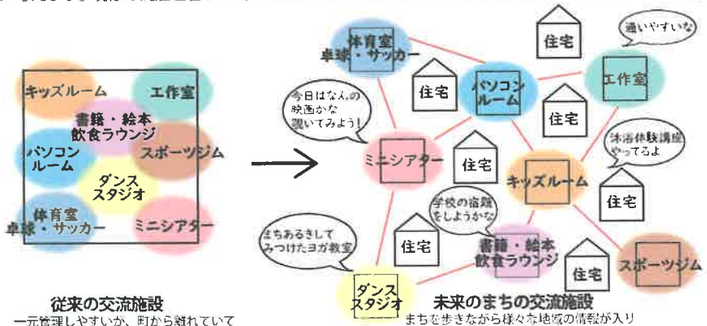
風待ちの丘に向かって風速が弱まり会体的に心地よい風を感じることができる。



風待ちの丘の形状により冬の北西の強く冷たい風（アナジ）を遮り、丘の上は風はほぼ無風となる。

まちの空き家を利用した分散型の交流・商業機能をつくる

従来の交流施設のように一つの建物の中に機能をすべて配置すると大規模な敷地が必要となり、まちの中心部から離れてしまうことで西郷港周辺地区に住む若い方や子供たちお年寄りの方、旅行で来た方が気軽に立ち寄ることができません。そこで、西郷港周辺地区の空き家や駐車場を利用して交流・商業機能、例えば子育て支援センターにあるキッズルームや工作室、絵本・ミニシアター等の機能をまちの中に散りばめることで近所の家に遊びに行く感覚で親しみやすい交流・商業の場をつくります。徐々に改修することでまちなみを維持しつつ、新たにお店を出店したい人や移転出店する人が容易にお店を持てるようにします。まちにどんな機能があったらよいか、空き家のどこを改修したらよいか、そこでどんなイベントが行いたいか住民と一緒にワークショップ行いながら共に考えます。既存の商店と合わせてまち全体を歩きながら居場所を探し楽しめるまちをつくります。



従来の交流施設
一元管理しやすいが、町から離れていて何が行われているかわかりづらい

未来のまちの交流施設
まちを歩きながら様々な地域の情報が入り住民同士で交流がしやすい

【施設利用・運営に対する提案】

各施設のイベントや空き情報等は専用アプリやSNSを利用することで、誰でも容易に確認したり予約ができるようにします。施設の管理をしやすくし利用する人同士が協力をして場所を使います。

施設利用アプリの例　　交流施設でのイベントの例

キッズルームでの様子
他の子の遊び方を真似しながら家とは違う空間で楽しむ

赤ちゃんマッサージ教室の様子
子供とふれあいながら同じ月齢の母同士で話す機会が生まれる

地域と関わりながら暮らす住まいをつくる

隠岐に来たら誰もが自然豊かな環境に憧れて隠岐で子供を育ててみたいと思うでしょう。そのように移住を希望する世帯や子育て世帯、元から住む世帯等が暮らしやすい環境をつくります。

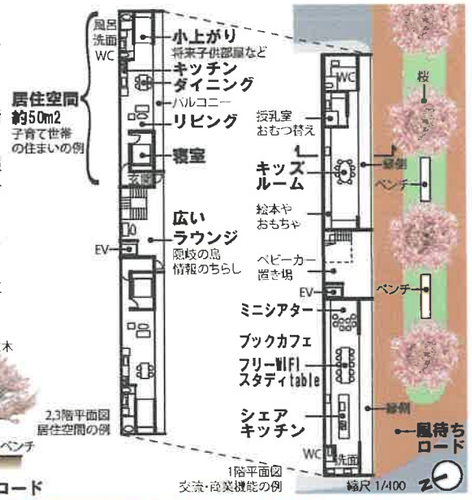
1階は、シェアキッチン、キッズルーム等交流・商業機能を配置し、2階3階に居住機能を設けて地域と関わりながら暮らす住まいを考えます。

若手設計者であり、かつ幼い娘を育てる母でもあることを活かして、隠岐に住む若い子育て世帯の方々と同じ立場に立ち、気持ちに寄り添い対話をしながら暮らし方を考えます。子供が生まれると子供の食事や健康、発育について不安になったり様々なことを話せる機会がほしくなります。地域に馴染める場があることで安心して子育てができると考えます。

災害時の浸水深さを考慮して縁側を地盤から50cmの高さとし、まちに開かれた景観にします。

まちの民家を改修して1階を交流施設とした事例

居住空間断面イメージ
縮尺 1/400



2,3階平面図
居住空間の例

1階平面図
交流・商業機能の例

縮尺 1/400

植樹・花植え体験を通してみんなで風待ち丘の景色をつくる【にぎわいを演出する手法】

フェリーターミナルへ向かう風待ちロードに、地域の方々と一緒に隠岐のヤマザクラを植樹し、桜並木をつくります。また、風待ちの丘から巡るようにまちへつながる道の両脇に花壇をつくり、地域の方々と花植え体験をしながら四季折々の花苗を植え、そこは花の道になります。みんなで風待ち丘の景色をつくることでまちへの愛着が深まり、そこは華やかで美しく夜はライトアップをして観光で訪れる人も魅了される丘になります。

西郷公園に植樹されたヤマザクラ

キエビネ
隠岐で見られる南方系植物

ハマナス
隠岐で見られる北方系植物

地域の有志で花植え体験イベントを行っている事例
地域の絆が深まり季節ごとに花植えをすることが楽しみになる

隠岐の景観をつくる石州瓦を使った舗装で歩行者のための道をつくる【景観形成の方針】

近代の日本海海運の発展により石州瓦が隠岐で広く流通し、隠岐特有の景観を生み出しました。寒冷地に強い石州瓦の赤瓦が移入し現在も使われています。そこで国道485号及び臨海道路の一部を歩行者専用通路とし、石州瓦を再利用した舗装にします。そこを風待ちロードと名づけます。石州瓦材により昼間の舗装路面温度上昇が通常の舗装に比べ低いため温度低減効果が得られ、環境にやさしく安らぎを与えます。

西郷西町の家並み
石州瓦の屋根が景観をつくっている

石州瓦の屋根

石州瓦でできた舗装の事例

隠岐産の岩・樹木を利用し、その土地にしかない建築をつくる【景観形成の方針】

隠岐諸島の大部分の土地は火山岩に覆われ、黒曜石、粗面岩、流紋岩、安山岩、玄武岩などの火山岩が見られます。ガラス成分とアルカリ成分を特に多く含む岩石は世界でも一部の地域でしか見ることができません。外壁や内壁に隠岐産の岩を利用し、玄武岩は吸音効果があるため天井材に利用するなどその土地でしかできない建築をつくります。島産木材を内装材、外装材、構造材に利用することで木のぬくもりや木の香りのする空間になり、また補修などで部分的に取り換えを可能にしてメンテナンスしやすくします。

隠岐の島にある岩

樹齢約800年の岩倉の乳房杉

地場産のレンガを砕いてRC壁を作る実験

玄武岩を天井に使用した例

設計趣旨（デザインコンセプト）

隠岐の暮らし つなぐ風景

人々が暮らし、営みが見えるまちづくりを目指し、
暮らしがつないでいく風景をつくります。

海とまちをつなぐ緑の広場

ターミナル前にまちのひろば・うみのひろばを設け、うみまち通りで海とまちを繋ぎます。ターミナル前を緑と賑わいで演出します。

みんなの居場所

既存施設との連携を踏まえ、交流拠点(あんきテラス)や銭湯(みんなのお風呂)をつくり、様々な交流の場をつくります。

まちを生かす案内所

点在する空き家を宿（まちの宿）や小さな交流スペース（みんなの部屋）として改修し、くらしの案内所を中心にまちとつながる仕組みをつくります。

エリア全体の機能配置図（ゾーニング）

◉各機能を繋ぐゾーニング

西郷港周辺地区を三つにゾーニングし、それぞれのゾーンをデッキや通りでつないでいく。

交通ゾーン

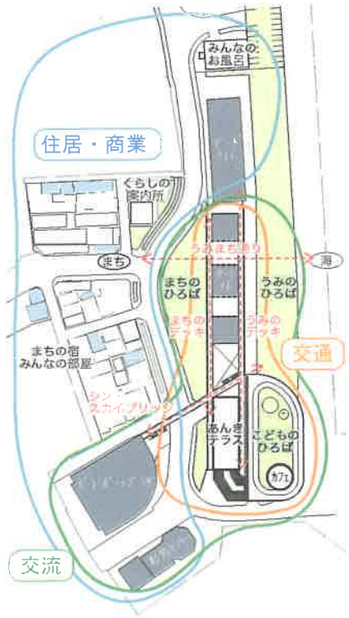
ターミナル南側に、駐車場・駐輪場、タクシー・レンタカー・一般送迎のスペースをまとめて配置。既存バス停と隣接し、ターミナル利用者からも分かりやすく、乗り換えしやすい交通結節点とする。

交流ゾーン

既存のポートプラザやお魚センターとの連携を考慮し、あんきテラスを近くに配置。２階でポートプラザと接続する。３つのひろばとともに、地域交流の中心拠点となる。

住居・商業ゾーン

既存の街並みを残し、くらしの案内所やまちの宿、みんなの部屋を点在させる。
飲食店やお風呂など、まちの機能を利用しつつ、住民との交流を生む。



◉近隣地域へ影響の少ない地区整備計画

まちの賑わいや住民の拠点となる「あんきテラス」や「みんなのお風呂」を先行して整備。
民有地移転に時間を要する、まちのひろばや道路付替えは最後に実施し、近隣地域への負担を減らす。
建設中に駐車場の確保や交通機能に支障がない整備とし、状況に応じて臨時駐車場や仮設通路も検討。

フェーズ1
- 交流施設/駐車場/乗降場の整備
- スカイブリッジの解体・撤去
- 臨時駐車場(既設台数確保)

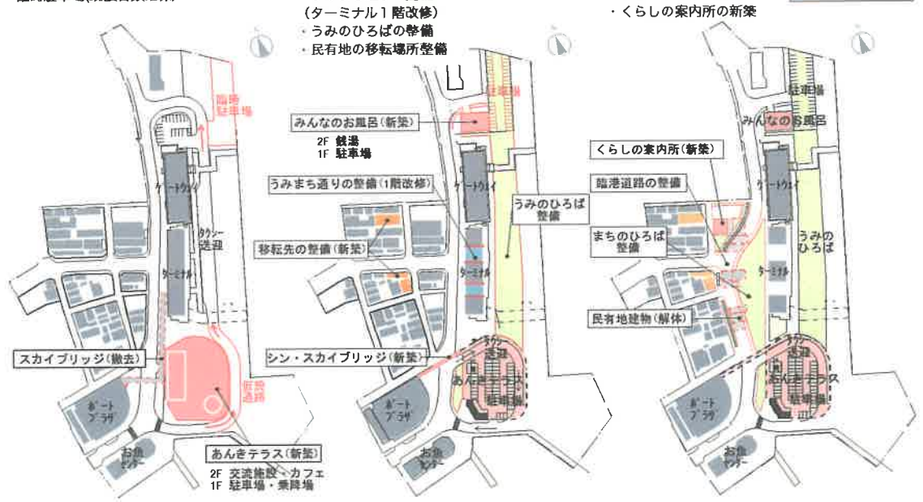
⇨

フェーズ2
- シン・スカイブリッジの新築
- みんなのお風呂の新築、駐車場の整備
- うみまち通りの整備
（ターミナル１階改修）
- うみのひろばの整備
- 民有地の移転場所整備

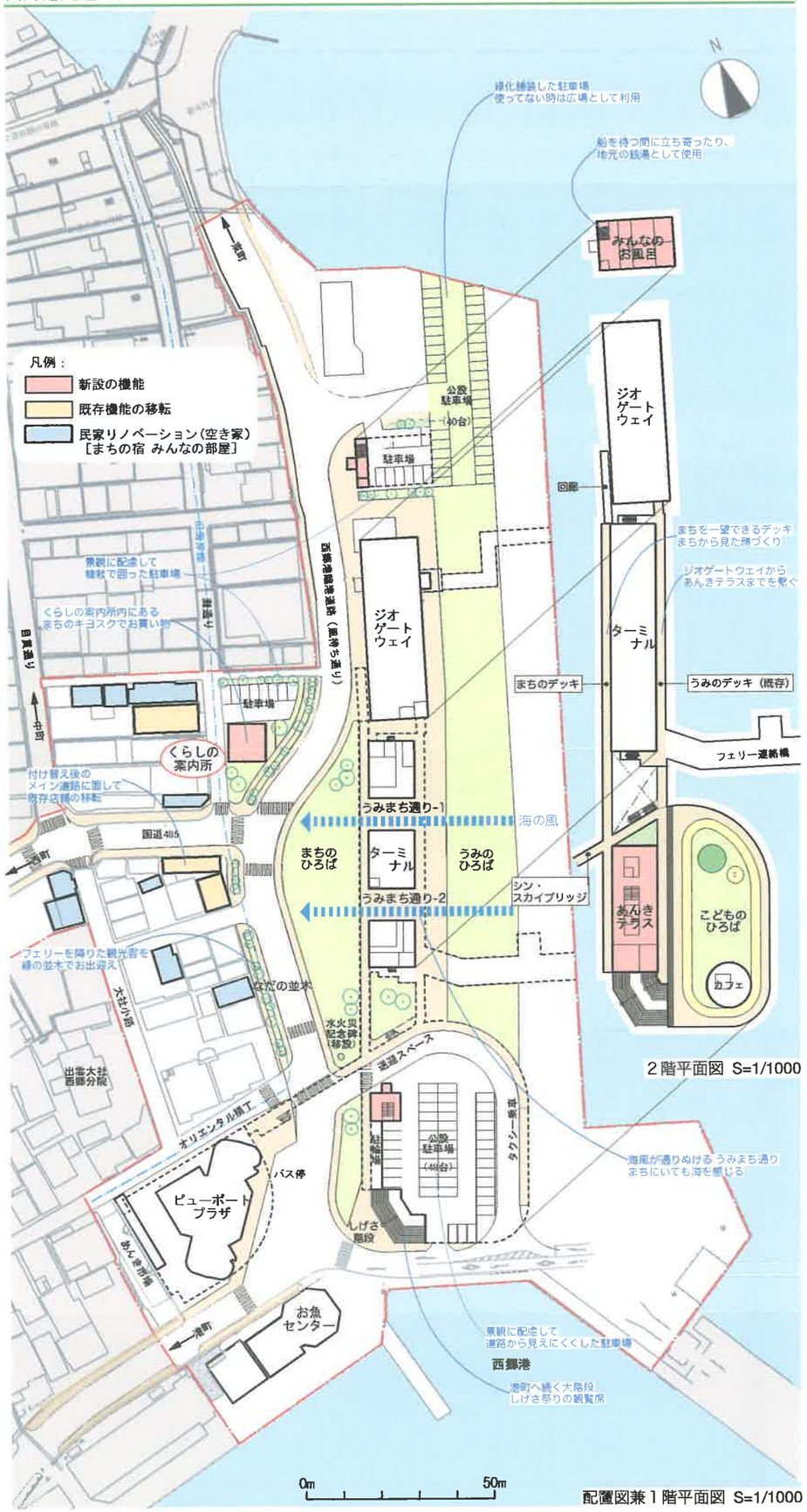
⇨

フェーズ３
- 民有地の建物解体
- 臨港道路の付け替え
- まちのひろばの整備
- くらしの案内所の新築

凡例
- 新設の機能
- 既存機能の移転
- 改修



西郷港周辺地区デザイン図



2 階平面図 S=1/1000

配置図兼１階平面図 S=1/1000

交通機能に関する整備方針

◉コンパクトにまとめた交通拠点

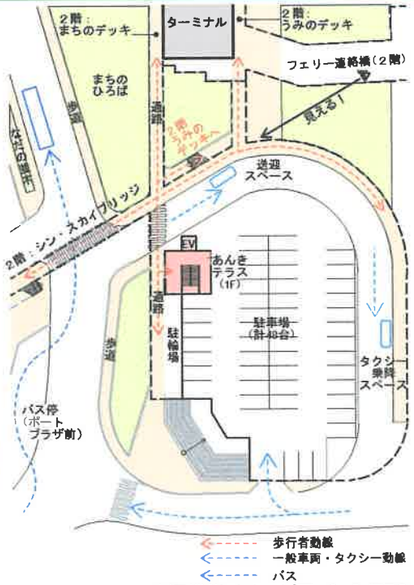
駐車場は４つの公設駐車台数を大きく変えず、現在の位置で計画する。
ターミナルと海との間にあったタクシー・一般送迎用の通路を廃止し、あんきテラス下の１階に集約する。駐車場や駐輪場も設け、車両の動線をコンパクトにまとめた。
バスは既設のポートプラザ前を利用し、シン・スカイブリッジを通ってアクセスする。
あんきテラス１階は、雨の日も濡れずに、各場所へ移動できる。

◉わかりやすい動線

交通拠点を一箇所に集約することで、船から降りてきた利用者をわかりやすく誘導。
また、ターミナル２階のうみのデッキ（既存）を延長するように通路を設け、誘導を行う。
ポートプラザへの通路（シン・スカイブリッジ）は、フェリー連絡橋から見える軸線上に配置して、わかりやすくした。また、ユニバーサルデザインに配慮して、誰にでもわかりやすい誘導サインの検討を行う。

◉にぎやかな歩行空間

交通拠点の集約によりできた「うみのひろば」と、臨港道路のスラローム化（道路をカーブにすること）によりできた「まちのひろば」で、ターミナル前は歩行者が安全に過ごせる空間となる。また建物外周に通路を設け、回遊性を高めた。
「なだの並木」は、植栽と合わせ幅にゆとりのある歩道とした。歩行者が滞留しやすい空間は賑やかなターミナル前を演出する。



交通機能イメージ図 S=1/750

ターミナル前歩行空間イメージ

交流に関する整備方針

◉大きな交流から小さな交流まで

大きな交流の場、普通の交流の場、小さな交流の場を、この地区での様々な交流のための適切な空間を整備。地元住民や、観光客の交流が、容易に行われるよう、くらしの案内所には、イベントの計画や案内を行い、情報を発信する機能を持たせる。

大きな交流のための場

うみのひろば、まちのひろば、こどものひろばといった三つのひろばとともに、ポートプラザは、祭りや大きなイベントが行われるときの、メイン会場となり、町民が集まる大きな交流の場として計画する。

普通の交流の場

新規で計画するあんきテラスには、1階を駐車スペース、2階にラウンジ、アトリエ、ギャラリー、キッチンを配置し、地元子育て世代のサークルや、キッチンスタジオ、高齢者のいこいの場、中高生の学習の場として利用できる空間を提供する。
みんなのお風呂は、公衆浴場として、観光客・地元住民の交流の場となる。

小さな交流の場

町中に点在する空家を利用し、小さな交流スペースを提供。「まちの宿」としての利用や、制作活動が行われる「みんなの部屋」にリノベーションを行う。２階建ての空家であれば、１階を宿泊客のリビング的なシェアスペース（まちの台所）や、制作活動のシェアスペース（まちの工作室）として改修。２階は宿泊室や寝室として利用できるように改修する。
また、一部の宿については、コワーキングスペースやワーケーション等、ビジネスシーンを想定した改修を行う。

交流機能イメージ図 S=1/2000

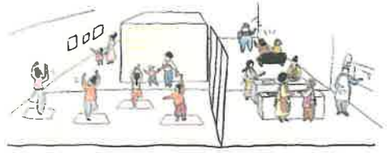
◉交流施設「あんきテラス」

ラウンジ・ギャラリー

ソファ・テーブルを配置したラウンジは、町民がふらりと訪れ、友人と語い過ごせるスペースとして使用。ギャラリーは子供たちの作品展示や作家の個展等に利用できる。通過もでき、誰でも作品に触れ合える。

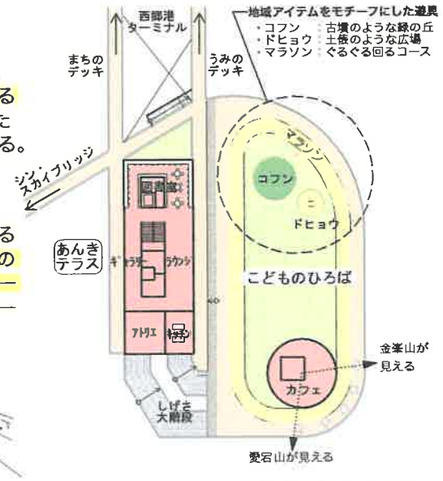
キッチン・アトリエ

調理器具を揃えたキッチンは、町民によるお料理教室や飲食系チャレンジショップの調理場として利用できる。アトリエはサークル活動などに使え、併設のキッチンと一体的に利用も可能。



図書室

本棚を配置、窓際に学習カウンターを持つスペース。本棚には町民宅に眠る本を贈呈してもらい、自由に閲覧できる。窓際の学習カウンターは、読書を楽しむ人や中高生の勉強の場として使用してもらう。



２階平面図 S=1/750

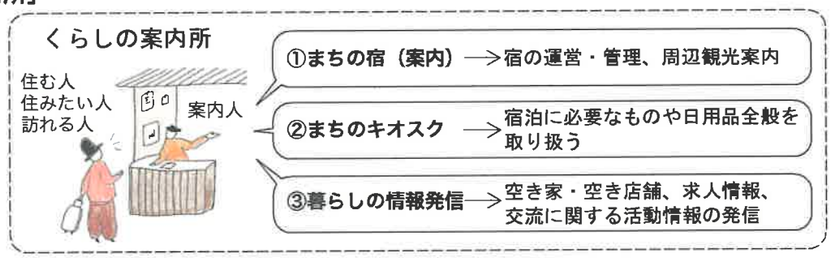
カフェ・こどものひろば

カフェは観光客のみならず、子育て世代の交流の場としても想定。こどもの広場には、地域のアイテムをモチーフにした遊具を配置し、こどもたちを遊ばせながら、ゆっくりカフェで過ごす。

商業に関する整備方針/暮らしの機能の整備方針

◉交流の拠点となる「くらしの案内所」

くらしの案内所では、３つの機能を持つ。
１つは空家を利活用した宿泊施設（まちの宿）の運営・管理。２つ目は日用品を扱う小売店（まちのキオスク）、３つ目は暮らしの情報発信を行う。
まちの宿を利用する観光客は、チェックインを行い、宿泊に必要なものはキオスクで購入できる。住民にとってはコンビニとなる。また、空き家情報・求人情報など、住民や定住希望者向けの情報を発信する。



◉まちをつなぐ「まちの宿」

まちに点在させるホテル機能

「まちの宿」は点在する空き家を改修して、宿泊施設として利用。建物規模に合わせて、ドミトリー、個室、一棟貸しとタイプ別に整備。必要最小限のシンプルな設備とし、食事は町の飲食店を利用、お風呂は「みんなのお風呂」を利用してもらい、まち全体をホテルとする。

つどい、まなぶ、むすぶ「みんなの部屋」

「まちの宿」の1階は、「みんなの部屋」として、様々な活動に開放したスペースをつくる。キッチンや調理家電を完備した「まちの台所」では、釣り人観光者が魚をさばいたり、地域のバーベキューの場となったりする。また、「まちの工作室」は、DIY作業が可能な大工道具を設置。地域住民同士のサークル活動や移住者による民家セルフリノベーションの作業場として使える。

まちの台所

まちの工作室

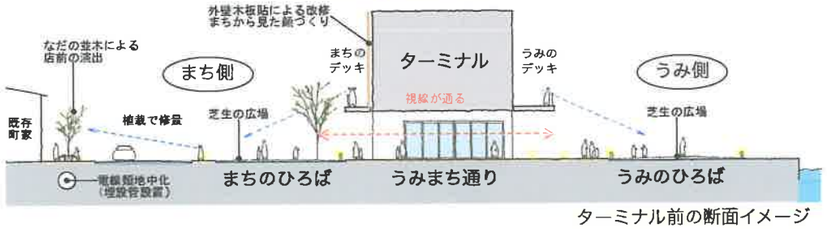
くらしの一部を共有する「みんなのお風呂」

地域のリラクゼーションの場であり、多世代の人たちが集うコミュニケーションの場となる。海の見える大きな浴槽で、家庭風呂とは違った贅沢を提供。マラソンや釣り、まちの散策の後に汗を流し、温かな余韻を与える。高齢者にとって、引きこもり防止や見守りにも役立つ。健康維持の効果が期待できる公衆浴場は、地域住民の健康に寄与する。

景観形成に関する整備方針

◉緑あふれる新しい玄関口

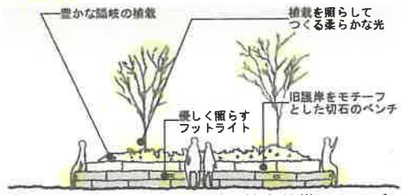
ターミナル前を、緑あふれる「うみとまちをつなぐ玄関口」とするため、観光客を送迎する「うみのひろば」とまちの活動を支える「まちのひろば」は芝生等で緑化を行う。民家・商店の立ち並ぶ、臨港道路は、旧海岸（灘通り）をイメージし、隠岐の切石をモチーフとした植栽帯（なだの並木）を設ける。
また、景観及び防災に配慮して、電線類地中化を検討し、落ち着きのある港町へと整備する。



ターミナル前の断面イメージ

うみとまちを彩る照明計画

夜間の回遊性を高めるため、うみのひろば周辺は港の雰囲気を出す街路灯を設置。
まち側は、器具の存在を感じさせず、足元を照らすフットライトや植栽への照明とし、まちを演出する照明計画し、海とまちで表情を変える。



なだの並木整備イメージ

回遊を促すわかりやすいサイン計画

歩行者の視点に立ったサイン計画を行う。港周辺を観光客が散策しやすいように、また住民が通り名や防災拠点等がわかるように、街中にエリアマップを点在させる。すでに街中にある、通りの由来や歴史の説明板など、既設のサインとの連携や情報の整理を行い、わかりやすいサイン計画とする。

既設サインとの連携と情報整理

防災について

◉防災を想定した施設づくり

災害拠点となる広場

ひろばは火災延焼からの避難や災害時の拠点となる。ひろばのベンチをカマドベンチやトイレベンチをとし、インフラの寸断にも対応する。
２階レベルに設けたこどものひろばは、大雨や津波による浸水の避難場所として想定。あんきテラスのキッチンで炊き出しが可能。

震災時の共同浴場

「みんなのお風呂」は、災害時にお風呂難民を受け入れる拠点として機能を持つ。使用する水は、井水や濾過水を検討し、インフラ寸断に左右されない銭湯を検討。飲料水としても提供できるようにする。

その他有効な機能の提案

◉西郷港から周辺へ

西郷港周辺整備を皮切りに、西郷港玄関口地域のまちづくりへの展開していく仕組みを提案。各町との連携をつくる。

各町にくらしの案内所の配置

西郷港周辺地区に設置した「くらしの案内所」を中町、西町、港町、東町にも設置。暮らしのための機能充実と各町を結ぶネットワークをつくる。

町民と触れ合う民泊システムづくり

小学生を対象として夏休みホームステイを導入し、島の魅力を体験。町民宅に泊まる「民泊システム」をつくり町民と触れ合う。観光から定住へと繋がる仕組みを作る。